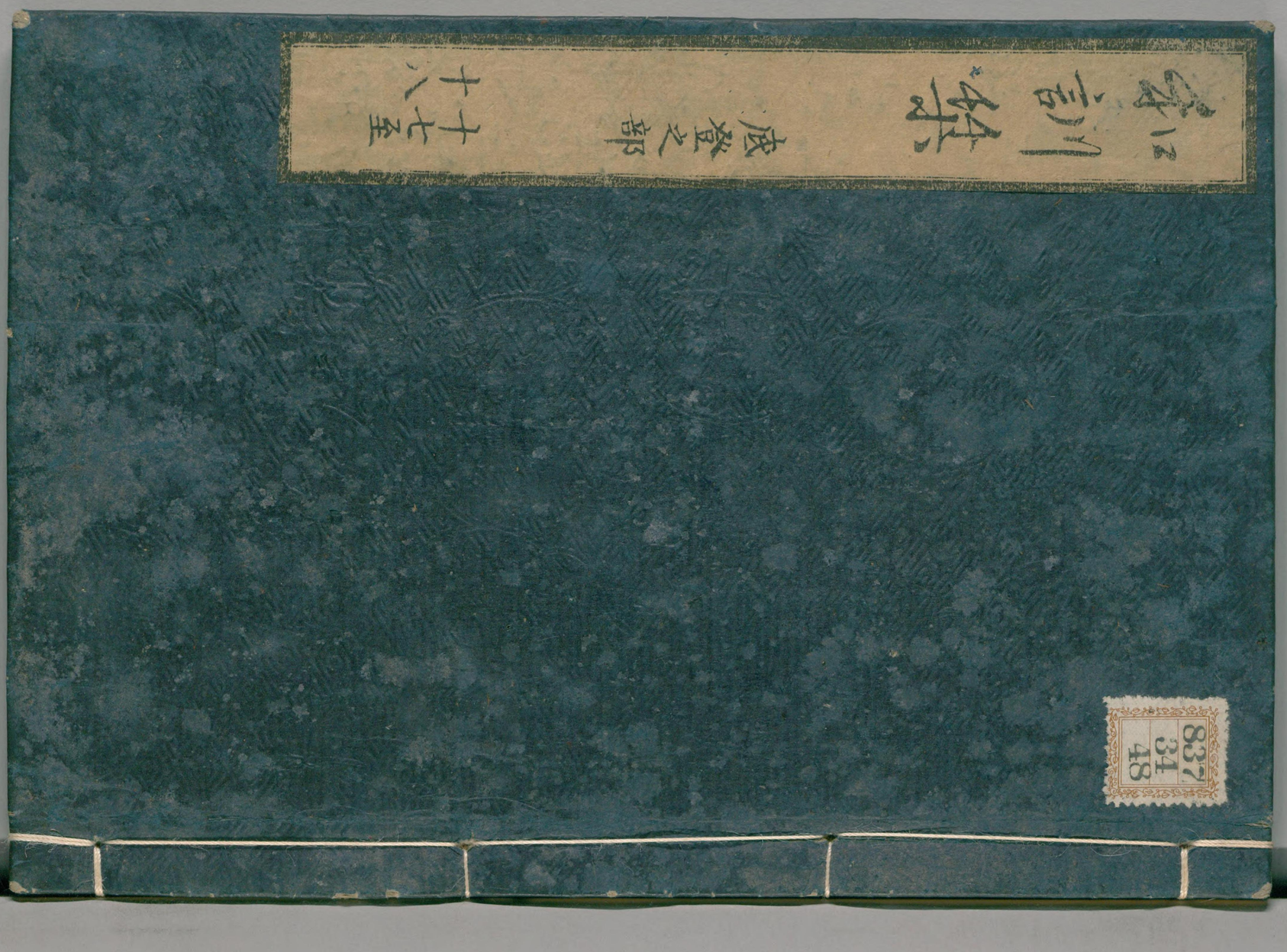
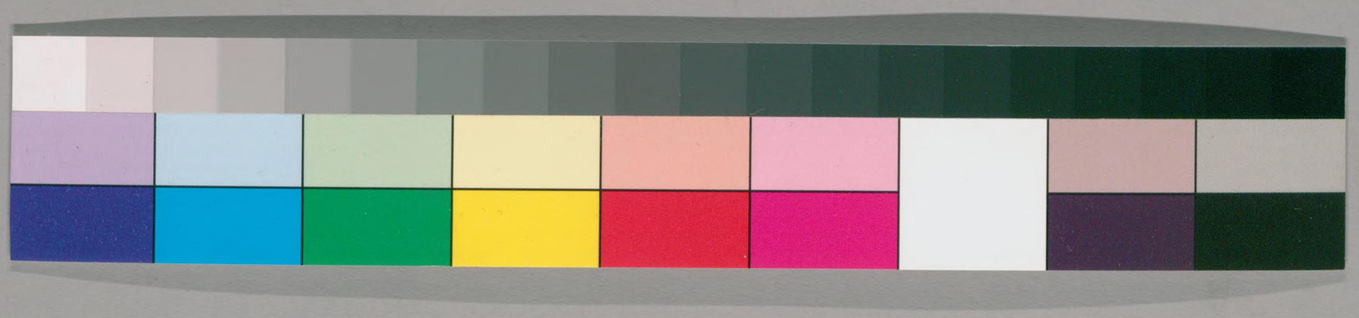




837
34
48
国立国会図書館　タイトル『和訓菜』　請求記号 837-48
ガラス使用

837-48

曹山文庫

倭訓栞前編十七

底の部

洞津 谷川士清 纂

根岸信輔氏寄贈

昭和八 帝國三

〇助語にいふハ万葉集に而字とよめり字書に而兼上起下之辞又因是之辞とあ
ひ[illegible]てとあるを欲ハ必ず上句へ見る意旨にてもしても同じ又やすやまて
けふりたにたてあらハ事ニ請の語意之〇濁るハすの濁音のとし君あらで秋あらぐ
おもほゆで人にしられでゐるんでうつろふものハ此ぬ濁れバ過去の辞之清めハ現在の
辞姥捨山にてる月をこその略之又しその略あるあり古事記にたちかもいまだとうずて
万葉集に妹にあはずての略之〇てを添ふ語をのべたるもあり思ひそめてさいはひそめ
[illegible]しかべかんしらべんをてくんハ果んと近世の所までといふべきかをつくとよむ事あ
し誤之法くといふべきをてといふんハすしてといふべきをつくといひうくし〇手ハ出之
とせつり指をもよめり〇出をよむハ濁れらでるの略之〇字迹を手といふ事源氏物
語にしらう漢書に天子識其手注に手ハ謂所書手跡と見えたり今もまゐる出
あといふりまて日本紀万葉集に書字をてとよめり〇手を法けくいふ詞多し

国立国会図書館 タイトル『和訓栞』 請求記号 837-48
ガラス使用

稲は奥は中はといひ又は長は行手縄はの旅之傳の略にて相接たるといふ辞也されて
物の示題といふは何てと称するは様字の意也○代とよむは日本紀に見えて直とよむは
万葉集に見えてさらあての略也一説に代は呉音の訛なりとてとよむもあし鶴林玉露に
弟と分直と書たまへるは是も呉音なるへしといへり○豊をよむは豊嶋の郡とよの急語
なるへし○幣とよむは和幣とふさてとよむ是なりたゞ又て之神にまゐらする幣の
字とよめるなるへし○春秋に星隕如雨と戦国策注に而猶如鶴林玉露に春秋経及
欧陽公集古録東坡古鏡録成引て如字訓而と如と而と音相通すといへり○古書
に帝もての假名とせるを

△てあて　手當の義目當をいふなるべし

△でい　兒女の父をまふすにいふ禰の音也といへり禰は泥の上声なる也孫にと呼は禰を音也されど爹の字音なるへし○金銀なとにいふは泥の音也皇明文則に宣徳間嘗遣人至倭国傳泥金畫漆之法以歸と見ゆ

でいり　俗に出入なるといふは事ある成いふ三代実録に既遣敦使推問辨紀若有出入国有恒典と見えたり

△でう　拾芥鈔田籍部に卅六町為一里里起西行于東卅六里為條々起従北行于南といへるも諸国の諸郡郷の名に條といふは此義に出所謂東條西條中條の類也

てうつ　古事記に一言主大神手打受其捧物と見えたるは拜の事也齋宮式に神宮司執髪木綿入外玉垣門而跪命婦出受以奉齋王拍手而執着髪とみえ集韻に今倭人拜以両手相撃蓋古之遺法也といへり

てうどかけ　大嘗會記に龍口調度懸十人とみえ弘安禮節に調度懸は弓六張矢六手とみえたり調度はもと諸道具の事なるを弓矢の事にもいへるは君の御もの調度とるもの具なるを其懸は其役を定むるよりいふ詞也よて枕草紙に調度を負てといひ東鑑に懸御調度ともいへり布衣記に主人矢を負弓を持事なし調度懸是を持とみえて重職なるのよしも東鑑に見えて文実朝公の語に故將軍有制自非譜代二十矢數二十人者不得與此選とみえたり弘安礼節小調度懸といふもあり
かならずしくは神代紀通證にいへり○後漢書の注に度音大各反といへはたくの音なるべけれど古へよりどの音によめり○一説にでうづかけと讀を故実とす烏帽子懸の時は音定とよむなり御車のそばに持行具に五色の打緒綾錦の紐をかけて結付

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』 請求記号 837-48
ガラス使用

なるとまて調度懸緒の義之武家にてハ弓の事にあまつり事んする事ある故之後世御
弓の衆といふ昔の調度懸の役人也
てうしがしハ　延喜式に調子拍二合とこれ樂器を納る物あるへしといへり
△てえ
△てをやく　四十二章経に愛欲人犹執炬逆風而行必有焼手之患とかゝえたり
てをつくる　日本紀に拱手とよみたり源氏にもをけらりて心ひよあてつくりたてまつ
るとかゝえたりこハおむさまといへり
てをまて　折手の義屋指紙いふ之万葉集に指折と出てさしおりて伴勢物語源氏
にもかゝゆ
てをゆる　圍碁にいへり枕草紙にもをゆるしたまひんやとかゝえ源氏物語に
あいまにしたしくもをゆるせうしまゝとかゝるまゝ
△てがた　券契といふ票も同し黄山谷云豈細民棄妻手形乎不然則今婢拳不能
昏者畫指節今江南田宅券亦用手募也とえ曲選に支休書上手摸印五個指頭
那裏四個指頭的是休書ともあまハ五指頭紙印証せしと又戸令に若不解書畫指為

記ともかゝゆ人さし指に墨紙点し是紙押て証とする也といへりされハおしく手の
形紙押たるよりいふ成べし又凡判といふ事あり女ハ右手のおやゆびの爪に墨紙つけ
て押也ともいへり○車に手形あり平家物語に見えたり鞍に手形あり悪源太
ら鎌田に教へしより始るよし平家物語に見えたり
てがさ　日本紀に書をよみたり書生書博士あるをこゝにより庭訓にしも書を見ゆ徒然
草にもをかく事といへり○後拾遺集に
雲井にくいてあふれとおもひしにてかくそうにあるかな
書にも掻をそへたりも掻ハあたまかく秘かくあふといふことにや
てがし　日本紀に杻械をあしかしてがしとよみたりされと杻ハもがし械ハあしかしあり
杻ハ橿と一物あるよし尓雅にこゝにうさまハかしの木をて此物を造れるよりまつるへ
今いふもでうはくでう是へてかせあしかせともいへり○ひびろしハ唐令に盤枷とこれ
△てぎ　手木の義十手ともいふ
△てぐつ　刑具にいふ梏也○あしぐつハ桎也
てぐるま　和名抄に輦をよみたり手車の義之朝野羣載に輦輿とも見ゆ親範説に普

通の車よりいちひさくてさみのと長き車に乗れども輪とも共に六府の官人かりて出入すといふ○輦車の宣下ありまゐ事て大内を出入と延喜式よ夫人及親王ハ後凉殿のくちと限るとあれども年中行事哥合に

雲井ゆもろ〳〵かよふ車や君よひろ〳〵しろ〳〵ん

でくるゆう　俚俛をよめる筐の中よりいでくるゆうの意なや豊ある武蔵相模安房總及よくれゆう豊後よでこえゆう中国よでき尚の旅くら

世の中ハ人ハでくるかあやつりてまゐセハ後ハがつくら

梁鍠ら俛俛棚の詩よ須臾弄罷宋ら妄事還收入生一夢中といつる是也

△てけ　土佐日記よ天気の急浩あら

△てこ　木挺或ハ木槍をよそら或ハ手木をもち又鉄挺鑓挺ともいつら○万葉集よ手児くいつるハ下のてとのに同じ一説よ弟子をいふハてこのまゝ古事記よ兄子弟子をゝへいでらよて武蔵下総にゝ手子をいふ南都にゝすてこといふ○備中のにゝら凡俗語よ強てくゝふゆゝの詞よてこといつら

てこゝ　万葉集に勝牡鹿の玉間の手児名とよめる東国の俗女の美るものを称てかくいふといつら江戸よ氏胡那明神の祠あら○奥州津軽の亀にて蝶をてこゝろともいふも其虫愛すべきをそよくるあるべし

てこゝろ　てこゝと同じ○さよや拾遺集に

さ彼やさ袋のてこゝろまもりふゝ川瀬のみとをかゝるも

むの玉ら池亀よ立るそが菊のきけさえるこのきれてこゝろさてこゝろさを照波の袂と釈せるとし可愛の義あらべし

てごたへ　手應の義槌字注よあら射中物毛と注せるよまをあら

△てさ

△てゝ　思ひてゝハ思ひてゝろ〳〵しろ〳〵ひてゝしへ誓をゝしへ也ゝら友らある注てる時

ゝろあら○万葉集よ義之とよめるよまをあら跡の垂なをいあるべし

てゝした　呉志よ手下兵多くとゝくらべ

△でゝ　銭司をよめる山城相楽郡の里也貞観中よ鋳銭司あるべし所也

てゝらぐ　日本紀よ手鈴ゝら西土にも金鈴と臂に繋ゝ事ゝら臂環に鈴を

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

も用ゐるあら〳〵
てもさび　手慰の義也といひてもさびの他といふに名ほよく似る〳〵
△てせ
△てそぎり　俗語也手慰の義といひつ
△てだて　方便を訓せり太平記る手段伐しまうり○歩猶をも訓せり和名鈔るに
㊀日本紀る手る皮猶伐執〳〵事乃ふえうり手筒のごく〳〵しきらあ意之字伯拾遺
博尹道（テヅテウ）とりふえうり
てゝる〳〵　手足（タ）の義成〳〵ゑとゝ反對也兎名鈔盛衰記あとふ手〳〵〳〵と
云り
△てらぐ　供給也手違の義也
△てづゝ　紫式部日記無名抄あてゑるに〳〵
うロてづゝもゝんじうり今人專女工の業〳〵東鑑る手自（ヅカ）まうり
る昏つゝ〳〵侍〳〵ひいやそゑつに淺ますく侍り○てづゝ山越前と
てつぶひ　今昔物語家持集に爲手傳於〳〵てつぶひ

てづゝり　新撰字鏡る紡ぞゑと靈異記る黄畳（タヽミ）とゑんうり和名抄に白絲布をてづゝら
のねのごゑくて朝野群載る手作布（テヅクリ）とりふえる也兎る交る也手の御調（ミツキ）の義日本紀る女手
未（ヒツジ）之調（ツキ）とゝる意あるゝ〳〵或ひ調布（ツキ）とゑるあうり万葉集る
玉川よゐそゑゝうさゝ〳〵ゑふそこのるれあとゝかあゝ〳〵さ
拾遺集る下の句伐昔の人の良〳〵ゑやあそこいわゑゑゑとゝ
らの國ゑるづゝ〳〵る事伐ハゑつゝんづゝうあとゝふちかゝ東鑑る手自（ヅカ）まうり
てつゝ〳〵　手親らをとゝり〳〵ゑんづゝうあとゝふちかゝ東鑑る手自（ヅカ）まうり
△てゝ　万葉集業兒為語紫式部日記あるに名白父の俗語ゝらと通す或ひ參乃唐
音てゐの説くとゝり○俗ゑてゝごゑもいふ夫賊ゑんてゝうら西國ゑてゝうらといひ
大和にゝゐんのゝゝ称〳〵肥前佐賀ゑて列營ゝいよ○和語ゑ夫のゝをてゝといふあ
り南數ゑて下男ゑも呼うり○小児詞る手ゑもいうり○神宮のあうらの俗父をて母ゑ
やとつふ
△でゝ　出て伐方ゑ集〳〵りかくゑありいを畧せ〳〵也
てゑも　和名抄る囮をよりう細鳥の媒ゑとゝもうり或ひ褌と

はなら今加賀人ハ襦袢をてしらといふともいへり
△てとら　俗語之手操のまんてとらくともいふ也○手操筆といふハ提梁釜也といへり
△てなえ　本事手段なくして訳せり或ハ手当とせり為業の訳なるもよめり
△てなが　手長とせり今いふてなづちの人也○手長足長といふハ荒海障子及神輿
れ水引なとに異人を紙書るあり○豊前なとに村里の名につけて呼ハ庄といふなるし
てあらひ　書学といへらるによる源氏若紫の巻に見ゆ寫字も同し古今集の序に難波津
浅香山の哥をてならふ人の始にもなりけるとかへり源氏にもまゝなにはづをそらくし
く浅けく侍らねといへり○てならひの小冊ハ宇治になり
△てには　てにをはの略也俗にてにをはのにはのちがひなといふを本いふてにははを
とて同じものなれより事々西土にていふ助語辞也
△てね　八代集中に一首見えたるてふを之後撰集に
かくばかりちかひし世をやいはくしてね君の中絶つをもあらんと見るへく
此てね白らんと由紀てんまうをまちてんゆきてに待ではあらぬと同しく世を空浅
くされ世をはくせといふ意なり

△て絲
△てのあや　新撰字鏡和名抄に腡をよめり今手のあやといふ手掌の文脈也左伝に出
△てのうら　貫之集に見ゆ掌をいふ俗にてのうらかへしともいふハ反掌の義也
△では　龜卜なとにいふ出端の義成へし上場也○出羽の国も今ではといへり
△てびと　日本紀に才技又工匠をよめり手技ある人をいふ也記に手人部とも見ゆ万葉
集に伎人とよめり日本紀にハ伎人をてひとよめり業ある人をいふ古事記に人手
韓鍛とあるもてびとゝよむへし手ハ上手をいへり○伎人郷ハ河内なり
△てふ○　哥に何てふとよめるハ何といふ義にて万葉集に云字をよめるといふ文ちとは
てまうて或ハちふともとふともよめるをみなはちふなると弘仁以後にてふと轉せるな
らむもいへり今も上総の俗なとちふといへりとも○中世以後の哥にハてふの詞をふ
るといふ意に用ゐたるも多しといへりされと伊勢物語に世のうきこと空にあって
ふと見えたり○古今集の序大井川和哥序亭子院哥合の日記土佐日記源氏物語栄花
物語なとにてふといへる事あるハ歌の句調の約言にのミある辞なりしともいへり
されと竹取物語にかくや姫てふ大盗と見えたり○蝶蛾すむハ音なり相模下野陸奥に

てふま津蛭ゐらべ又てこの秋田うへらこ越後よてまべつくら信濃まあまびらとふかひこのてふハ蛾あり信濃陸奥上野よひろとつふ西国よひろろと云伊勢にひいろとふ小野女郎と呼者あり水蝶く〇梅よ蝶ハ時節たろうよて詩よ一生不得拂花蝶と。

そうさまとまた木集よ宗家ゟ

あつめろくそう郭公羽もも白ふ〜ん軒端の梅の花乃袖てふ

とよめろ〇粉蝶を放ちて其止まる所よ三四すにおすふとそ〇小

田〇てふ〜とまる〜宋の范よやまれもとまる〜んとつふ童謡ハ古

意と為ようさゝら羽州の方言よてふ〜ぐともゝら爾雅翼よ菜虫の化するといふ

ハ黄蝶ゟ〇東鑑よ宝治元年三月黄蝶飛幅一丈許列三段許充満鎌倉中是兵革

兆也永平則常陸下野天喜ホ陸奥出羽有其怪将門貞任等及闘戦ことゝ文治

二年よ京師雨蝶と玉海よふ〜ゟ〇明和戊寅年冊波大江山のを亀小野平村と

いふふ八月の比蝶ゟわら地よ墮れい落死すをそ三四すにおすふとそ〇小

麥よ〜蝶よ化す搜神記よ麥之為胡蝶也と見えゟ〇口語よてふとうふ

いふハ蝶の楽ものゝ如ゟ出るあり源氏河海よ蝶の楽ハ宇多院御時被作之由見李部王記とゝゟ一説よ蝶いかひこの蝶之子孫生産絶ざるの義なりとも山鶺あり忠

孝のものあらと禽経よ見えたをハ此二種を用らるとゝゟ蝶ハ和名抄にいふ胡蝶楽

ゟ多ハ休源抄よ聖明楽とゝゟ〇蝶鳥のゝこの事聖徳太子の比よりとゝ色

でふ　和名抄よ門戸具に鍵と半〜漢語抄よいふ戸の帖木とみゝゟ源氏よでゝこの

いとゝくさびるれなとよゝゟ今ゝ俗よ鍵の字と用れと字書

を見ゝ〜或ハ鎖をでふゝ〜鍵ハふせぐことゝゟ太神宮式よ牓と見ゝ次よ鋪鍵あ

らて鑰一具と半せゟ注よ管とあるいひつの事あるへ〜又勾古堅根雄あるの名目

ゟ次よ乾鑰あるハ今ゟでよゝ〜浮ハ鑰ゝ白楽天ゟ詩よ印鎖湿難開ことゝゟ

〇牓も牒のゝ〜よそ朝野群載よ牓状とゝゝ遠江国牓伊勢大神宮司衙ゟ出

ゟゟ

てぶり　手曲の条ゟ癖あやしい条之万葉集に

天さうひあよ五やせすまひつ幼乃てぶりわすゝえよゟ

五とせ六国司文替の年限四年ハ近国ゟ五年ハ陸奥九州あとゝ家持越中の任の時にも

まゐあさかりこ〜よ五とせゟみゝくてとよめろ〇手振ハ供奉の馬副をいふ六條修理

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

太夫
霞こめ川なみの山花とさそひてかちとをそありそなれしよ

○俗語に徒手をもいへり

てふてふ　蝶花形と書り佳子提に飾ある其用ハ塵を覆ふための蓋なり文典
薬頭の献ずる屠蘇白散の袋にも蝶の形をするハ蝶よく酒毒を解する故也といへり
今男蝶女蝶なとの折形あり是もかひこの蝶也といへりかひこハ子を生じけて子孫繁
昌の祝也○鎬馬の具に蝶形あり長秋記に見えたり

△てへ　古今集に門させりてへ拾遺集に落ぬもろてへ大和物語に忘れさらりとてへ
あやこてへあらそふの義也○てへいてとをいふの義也拾芥集にかなわ治の弁に見えたり

てつ　者字をよみたりといふの義也といへ友ちすして二四相通しその音とあるハちふ
とちやといふ所を句絶の辞也○てへもハ或ハてれバともみへかと起去の辞とす
るも文字ハもぶしまる上句に属せる語書に多く用来れるを発語の詞のごとくに
得らへかに属するハ誤なり○一説に皇明通紀の注に者胡語然辞とみゆ明宋宋

△実録に栄宋北慶乃ぬに捕われ数年北慶王に許して本国に帰さんやと諸臣答の辞に
者者といふ者々を唐音にてしらえいしといふ其ちえい訛ててへもハとよむべしといへり○
和名抄に人名に者度といへるに多く今の氏姓にも称せる俗にといふハといふべきを
といへるといへり　その義なるべし

△てほん　源氏後拾遺集類聚雑要東鑑等に見ゆ法帖をいふ日用雑字に手本と見え
又ハ役義兼能の書つけをいふ今てほとならぬていふにもちら著聞集に花園
左大臣家に初てまゐりたる侍の名簿のはしに能ハ歌よむと書たりけるを
見えさせ八本邦にも古へハかましに用ゆ

△てま　手間の義貫之集に
おもひきや鳴ありに色をさまへしるてまちおもて哀としぞ
又手拍の古語と見えたり○てまの名ハ出雲にあり風土記に意宇郡道通図東堺
手間剗と見ゆ六帖に
堀川百首に
まてまもしく人まちたんや永せこと玄あかなてそらしまでぞえけし

さらかしものひ〳〵かとも八雲〳〵川てゐの図も秘いさま〳〵

蜜春不用關城固の意之〇古事記ゟ伯枝國之手岡山本と見ゆ倭名抄會見郡天萬とあら出雲と隣國あれハ一處あるやゟ旧事記ゟ手向山とあるハ誤ある

てゐら　手鞠之紗越之とゝら童女の弄ひ物之中山記ゟ女子於歲初皆擊毬為戲と見えたら帝城景物略ゟいふ抛子兒也ともめらちらとゝふあら〇てまり

名ハ物圀名之ことゝら山てまりと称すハ褒ハ仙人琉球人の手ゟ

うあるゟ其名さゝおてまり紀さ約ゟ約てうづするを誂頬とゝひこでまりハ雪越名之津輕ゟきづうけとゝふ

てゐさぐら　後撰集後拾遺集蜻蛉日記あてるゟ見えたら手洗の条之

△てみづ　禁秘御抄に手水と見えたら今ハてうづゝゝふ枕草紙あどにてさゝしたら日本紀に洗手水とおあるそきづとよめたら儀式帳ゟ洗手承手之区二所大神乃朝大御饌夕大御饌乎日別齋敬仕奉と見ゆ齋事ハおゝ〳〵ある〳〵き事之約てうづするを誂頬とゝひてうづぐらと類盆とゝふ〇手水の粉建武年中行事に見ゆ

△てん　洞ゟゝふて残係ゟる洞多〳〵ひてんゝゝふあるんの条也〇和名抄ゟ貂の和名とゝたら音の轉ゼる成〳〵さんく黄鼠也狖ハ倭字ゟやゝゝたら蝟秀ゟ名ごく〳〵ゟ〇ゝたらのあき間のてんかゟらハてんを捕ものてんハ兎狐捕ゟよそてんあき山ゟ兎かごろゝゝたら〇埃嚢抄ゟ文字ゟ加ふらをゟゝとゝふハ梵語の摩多翻〳〵て點ゟゝふ見えたら訓點ゝ本あくゟゟら〇北山抄直物の條ゟ其剰國者國官之上引點也と見ゆ今ゟ残うけろゝゝたら

〇辰の一点寅の四点あゝゝふ刻也とゝたら

てんぐ　殿下を書ら儀以来皇太子諸王に称する事ゝ事物紀原ゟ日本紀ゟ中臣鎌子連の中大兄を称ゼる是ゝ今ゟハ色ゝ〳〵皇太子の称やゝ〳〵当時ゟら〳〵関白の称とあゝら朝鮮国ゟハ其国王を称すとそ

てんま　傳馬とゟら通鑑宣帝紀ゟ出胡注ゟ即驛馬とゝひ孝徳紀及令ゟたゝら天野氏曰倭俗以公役驛馬謂之傳馬又有幕下有司所出之印章奉事而經過之人以之為證俗称御朱印傳馬若異邦以鄉史印章得騎遞馬〇傳馬船ハ枝小舩也

〇屋ゟ開さゝるまゝ残ゟふハ天窓の略ある説ハ誤てんなゝ〳〵俗ゟ天日を天道とゝひ伊勢の外宮神祇祭る残天道とゝふハ浮屠氏の

天道大日の称よりまる也○曙家ヨ天道神と称るハ牛頭天王也されど本據あり

○尾州丹羽郡寺木村の天道の社ハ式の稲置神社也

でんがく　洛陽田樂記ヨ永長元年之夏洛陽大有田樂之事初自閭里及於公卿ニ

乃至ら高足（タカシ）腰鼓銅鈸子（トビヤウシ　サヽラ）編木等の藝あり又ハ鼓あり田野の樂といふあり

或説ヨ神樂を祈て申樂ニ〳〵申樂ハ猿樂ニ〳〵田樂ニ〳〵ともいひ今信濃佐久郡

志賀村ヨ田樂屋鋪あり常陸久慈郡金砂山の神事ヨ田樂あり○俗間豆腐

の製ヨ田樂といふハ田樂法師の笠ヨよりて踊る鳥ヨ似るをもて名ケしもの

といひ禁裡ニて御煤拂ヨ事ぬさをもてはらふ

てんびん　等秤の唐音也又天平ニもとづく

てんぢく　既をいふ建安の天目山の名ヨよりもて磁碗の源を試いふ建盞の名を同

一○甲斐ヨを天目山あり禅僧業海元ヨ入て天目の中峯ヨ嗣法ニ帰朝

て當山を開ヨ天目山と号す○駿州天目あり西國中國四國北國常陸ヨ茶

碗ハいづら

てんぢく　轉蓬字後漢志ヨとえらく世ヨ放縱不拘の人ヲ〳〵ハ指て轉蓬者と

いひ蓬ハ葉ハあぢ〳〵ヨ似て花ハ野菊の開けるごとし一河原ヨまじ一詩ヨも首如蓬蓬

とある

てんぢく　又ヨ痲を指ていふ後漢書ニ張騫ヨ天竺ヨ使して帰ニ〳〵又人ヨ

点つるべきふるまひハセ一河海ヨ古人の詩册ヨ批点あるといふハさらに褒貶ニたる

意ニハあれハ其義也といふら雅注ヨ以筆滅字為点とみえたら為出ヨ点ハらけるなり

てんぢく　てんぢくの文字ヨ捜神記ヨ鈎其字頭といふら是也

てんぢくびと　殿上人と書ら逍遥院説ヨ四位五位六位ニても昇殿を聴ヨる人をいふ

あら一書ヨ殿上ハ三位以上あれハ殿上すまじ一又人の詩ニまでるを賞ニていふ詞あり

とら又雲客ともハ月卿ヨ對せら○海人藻茹ヨ童殿上人ニて古ハ摂家の御子

おぐら元服以前ハ宮仕いせたまふ之ヨよりて其後久〳〵絶たらざる也

△てめ　古今集ニさらハさらてやとよめり一そあら折てんとふヨハ一万葉集ヨも

△てもとなふ　ヨを休めも意ヨもすまじ一あやそなふら

△てや　俗ヨ出ぬ代でやねとよふハ出やらぬの意語成ニ一○西國中國ヨ語未ヨハ

△てゆ

△てよ

△てら　寺をよみたり日本紀に精舍伽藍をもよみたり莊嚴のてらかくやく意にや今の朝鮮語にてるといへるもかく韓語にや○寺尾の城ハ上野にあり世良田政義ノ居城之○伊勢大神宮寺先為有宗遷建他處而今近神郡其崇未止除飯野之外移造便地者許之三代実錄にみたり

てらふ　日本紀にひとてらふとこゝも街をよみたり人に照す義成へし字書に言行相會而自媒以利己とみたり衒も同し新撰字鏡にてらハすをよみたりハすノ反ふ又眩賣をもよみたり又忕我よめり

△てり　歟にてりうそてりましとなとよめるハ羽色照まる我いふ成へし

△てる　照をよみたりたへ反てあれハ妙をもてらかしとる詞あるへし増韻に日曰照とみたり日本紀に明又映又昱をよみたり新撰字鏡同してらしハら寸ノ反ふあり靈異記に炫もよみたり

てるひ　天日をもいひ天子をもやまるへし日本紀に白日をよみたり

△てもん　俗語也諂練の音和語の熟字あるへし

△でろ　出羽の方言に泥我いへり

△てこぎ　手業の義也

△でゐ　東鑑に出居とせり愚昧記にも出居廊とみたり内より出て客に對し居る形我いふといへり田舎にて今もいへりでのくちといふもでゐの口の義也

△てゑ

△ておひ　手負と書り手を負ともいへり古事記に負賤奴之手とみたり日本紀にハ被傷於虜手をよみたり

ておひ　庭訓往来に手蓋とみえたり体源抄ハ幡殿着鎧次第に第十三手蓋とみたり後の籠手なるへし

倭訓栞前編十七終

倭訓栞前編十八

洞津　谷川士清　纂

登の部

と

門戸とよむは通るの義といつる在城郭曰門在屋堂曰戸とあるも西土は皆ひらき戸也我邦の上世も同しやまと戸は日本の制也といつる遣戸妻戸織戸なともや○神代紀に水門とみなとよそ萬葉集に川門とかはとよそうされは由良のと久志のとなとも皆門乃字なるべし渡字を用るはあしく○所をとゝいつる事古語に多し○弘仁私記序に古語謂居住為止ともあるべきなり○止苫迹なるをとの假字に用る事日本紀にあるべきなり訓の畧也或は苫は苔の誤寫也たゝの音をとゝに用うるは迺(ナイ)との耐(タイ)をどに用うるかたしといつる○外は内に對しいふてとの畧外宮又外山の類也○鋭はとしの畧時利はときの畧常はとこの畧也○音十鳥弟與なしとも皆畧語也詩經に以字を與字と通用せり左傳に其も與と用う之與と文に用るは語を緩する也又及與とも連用せり○瓊をよみしは誤也ぬと訓とへしとて○砥はあたせど礪はあらと也

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

物を磨ぐらむ也新撰字鏡に砥をとぐと訓し礪をやすりと訓し磯を
いそ類聚雑要抄に近江砥山三河名倉上野戸澤紀州神子濱但馬諸磯筑
後天草對馬青砥あり高雄山に名産あり西行法師
　る雄ある砥嵯の山のやすりもてなれおのがかくれとそなる
○助語に多くは真字伊勢物語に諸とよめる是也又及とよめる彼と
此字の意に用ゐるより暨も同く將兼和をもともに皆俗語也以をもともに與也
の訓あり又以與とも連用をも数の助字に数多あれど皆與に當與也施與也又授
也又侍也又如也なと注せり然のごとく又伴ひけどひとしきなどの意也ちふく
もこふくもあらんあるんやのごとく注せり然のごとく通ずるものちごとくこえつ
るの意也今い限の色とえつるまいと色よりいさぎよきかと意あり
いさぎよけらひとよめるかと意あり○その畧あり古事記に醉
く吐あがつことらひふとみてぐらと取持てらつる是あり捧物として奉る意
ある万葉集におきつもを往来ところ伊勢物語に君が方にそよる
しるある薫盛集にふそろる並いなる祝詞に天御蔭日の御蔭にと皆そ

の畧あり○日向郷名に靫嚊とくくりあり大隅郡名噸吹の吹の如し○古出
ヨカ字次ての假名にそ又澄をもこの假名に用ゐ○椅をどの假名にそ
△とあく　万葉集に鳥網とよそろ和名抄に鳥羅をとりあしとよめる是也
とあさ　遠淺の畧也海濱の荒砂をいふこれまた
　ろわとらいふをけさひふこれまた
△とこ　著聞集にとこなつるくとこのりくに
仁三年大宰府言カ伊国賊来侵とこえ又新羅送還カ伊所掠壹岐對馬男
女二百餘人とこ小右記にとこえとこさせ
解にも高麗國為禦カ伊賊遣彼邊州而還為カ伊被襲也とこ
△とこ　いとこうるく物語にあるい疾の畧也日中行事に上首のごとく人とのりくに
うをもとこやとこえるとこと同し下にくまねしやとこ老とこ亜とこあり○桃
竹の幸をいふ西土にふ藤席いとこ
胴の音大腹に注し廣腸也に注を胴体あるにふ胴字をも用ゐるまと本
ごう
多よ非す○身甲をいふ胴の畧也○胴丸にふ甲の板七枚すゑて縫の脇板

ふくら胸板と通しうるなり○鼓ふくも矛同し木匡也○車のどう源氏よ
りそゆ倭名鈔ふ筒字ふ用ふう○樋の類よりふと筒より轉ふう詞ふる一一
○博奕ふの一ふ筒の矣ふる一一新猿樂記ふええふう○俗の口語ふ何
とふ事とどうとふうどうしやとうすふ類也とにがへの轉訛ふる一一
どうろく
唐式ふ燈籠ふ(ふ)禁裡七月の燈籠ふ二水記ふ十三日今日各
燈籠進上ふえ明月記ふ近時民家今夜立長竿其末稍斗如燈挂物張
傘挙燈遠近有之ふえふそれ寛喜の比まくい官家ふ用ねうしふる
一一さんい中元の燈籠い堀川院の時ふ始ふと御湯殿の記ふ十四日御と
うろくあるめかねふうまるる室町殿より嘉例のすどうろうまるるふえ
えふう○まうどうろうい燈球也走馬燈ふ一一ふとふうあげとうろうい天燈ふええふ
ふ○石燈籠あり金燈籠あり○本朝式ふ燈楼ふ作るい掛る物ふうふ又燈
挑細ふふう事雲圖抄諸節會ふる侍中群要同し涅槃經ふ燈爐あり三才
圖會ふ燈架あり○燈籠大臣ふふう内大臣重盛卿也事ふ平家物語ふ見
ゆ

とうぐう 東宮ふ書り太子ふ称ふ御自躰の上ふそい東宮ふ書御居處に
就ていい春宮ふ云い故實也ふふう
とうさん 酒盃をふふ北山抄ふ螺盃銅盞ふふええふう又とさんやふふう
ふえふ或い湯盞ふもふう又とさんやふふうふふうふ今ふふふふふものふ古田織部助重能茶
亭の饗ふ侍る時製し初る小盃の形也ふふう
どうぼう 童坊ふふう鹿苑院義滿公の時華奢ふ事ふ一一諂諛ふ風ふする
ふ細川頼之ふふつく俳優の徒ふ剃髪し一一士太夫の前ふて誄謔歌舞迎
合諂笑ふて恥ふらいふふうて童坊又伎坊ふふふう
とうとう○今ふ将軍家及尾張紀州ふふふ○高野東寺ふて同朋ふ呼
いり者也
とうとう
とを 十をふふうとい事也又ふ尾ふ云ふう○南朝四
百八十寺ふ十をふんふ古来ふふ易ふう字彙補ふ十當音旬古人以十日為旬故
如此讀ふええふう旬ふ一一ふふう○万葉集ふふ戯ふ假字ふ二五

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

とおり

とぶ　古事記に行のとぶ〳〵にとゝ見たるに同じとぶことも見たる後
撰集に
秋萩の枝もとをにあらゆくは白露まくまるなりあへる
とをよる　万葉集に見たる行のとぶ子等又なよ行のとぶ依子らなと見え
たるまたもみ侍るの義也
とをの行なり　田文の歌に見たる此事は聖徳太子の秦川勝が悪夢をけしたまふ
呪事なるよし詠事本紀に見え全浙兵制にも載たまと云得らくし
なりれよのとをの行なりのこれめさまんなりけりふのとをのよれらな
十の眠にて十界といふ長夜の眠の中に十界を流轉をとゝなめさまんは皆目瞿也と
いふことをとは音なるべきれはおとのかなる也いふ
とをとらひつゝ　伊勢物語に十とらひつゝ四つは一にはりとゝ見たる六條本には十とぶ〳〵五つと
見えたりさまいくまをおくく相馴見し中の年月をかそふるに十、五つにて大かた
五十年なりそが内に四十年はあらとそひとけたる中なると四つは無にはりと断まり

よて若干年に年たるも十とて四つは無にはりをとて四十年になりてよみたるは四つは無り
けりとあるをうけてよめる也と後足の説なり
△とが　罪過といふ尖る意にくするなれ義也或は科をとゝ見たり真名伊勢物語によみたる
も過失の義也○三州とが明神は一宮也本宮は山頂にましませり式に砥鹿神社と見
ゆ○とが川は津國にあり藤原雅教卿
いかなりし濁ありてうそれかとにたかとう川の名を流をうむ
とがむ　咎字尤字なとをとゝ見たり科よりむとり出は雅也と注する意也神代紀に
慍をよめるは義訓也古事記に登賀采受と見えたり
とうま　中臣稜詞にしゆ鋭鎌の義也又磨鎌の義なるべし杜詩に新月似磨鎌と
見えたり
とかく　神代紀に取捨をともかくもとよりこと三代實録万葉集に左右をとふかくにと
よめり古今集にとすまいかくまかくすまいはなるいひしらは源氏にとあれはかく
ま又とさまかくさ後にとは外の義かくは此の義なるべし兎角亀毛の意にいふは
傳會なるべし今とかくやもいふ亀毛兎角の字は空海の書に出れとそは比喩也

とがくし

信濃國に戸隠明神ましませり古事記に隠立磐戸之戸腋とあれハとかくしと訓すへし神名式に水内郡白玉足穂命神社健御名方富命彦神別神社の二社即是なるにや今戸隠奥院ハ手力雄命中院ハ思兼命宝光院ハ表春命と傳へり神社考に月神之子手力雄神其子侍倉遠神者諏方神也とみゑたるも神名系譜ともにしらぶし舊事紀に天表春命ハ思兼命児信乃阿智祝等祖とあり伊那郡に阿智神社ましませり戸隠山九頭龍窟ハ地主神九頭龍権現也毎夜粢三升を炊て並に梨子をもて神供とすといへり

とかへりのはな

松によめり松ハ百年に一度千年に十度花咲といひ傳ふる也今ことはかくいふもの也其花紺色にしてくされさるに咲といへり常のはハ年毎に咲松黄といへり

〈ときこと

時辰をいふ常の義也一日の十二時も一年の四時も千万世の時世も歳月のうつりゆきつゝ其常を失ハさるをいふなるへし日本紀に期をよめり諱訓抄に代もとよめり又疾の義文選に時来亮急絃とみえたり逍遥院殿歟

何事も時ありといへるも夏なりハにしとよまれたり麻乃さくろも孔子も時に中をいへり◯時者ハときをなくよむへし倉公傳にみえたり◯昼夜十二時の刻ハ日の運りをもて取まわしたるなり日出の方を本として混蠮子にくくらへびれハ十二に分たし也日出ハ寅也何やら北へよる時も寅の方よりへよれ来まて十二寸也といへり阿蘭陀の法ハ昼夜を廿四時に分つといふ◯初字を詩の韵脚に用ゐるをもそれと訓を初時の義なり◯僧家に齋といふ言時に非る食を戒むるをもていへり老学菴筆記に蜀僧招客暮食謂之非時といへえたり◯和名抄に因幡国の仁名に罵城とみえたり日本紀に罵を駟と作りといふとよみえるに同し◯名によみえるハ弓削以言為大江と東鑑にみえたり安徳帝の御諱言仁もときとよめり◯土岐の姓ハ美濃の郡名より起る太平記にみゆ

ときハ

常磐といひとてハかたちハ変きるれることきをいふ◯葛野郡常盤村に常盤殿常磐亭あり其亭ハ源常の山荘也雙丘の南にあり平頼盛か隠せし所也◯源義朝の妾に常盤あり国初の舞妓に常磐あり石田三成の女也

しらひふしを真西山の孫女の鈫舞妓てなると同日の談なり

とけなハ　觧縄也後に用ふ口伝に嚼解の態あり今紙捻(コヨリ)を用ふ江次第に東廊の大鞍に祝師着座臨禊詞及八張解縄了禊了又平野祭に宮主奉仕祓詞の細書に到祓清之處以人形令呴給到中臣秡八張取割之處解縄給ふとみえたり

ときハぎ　常葉木なり万葉集に常葉之樹とみえたり元正紀にも其地者皆殖常葉(トコハ)之樹とみえたり四時不変なるをいふ也て松をとれハ木ともいへり中山録にハ福木一名常盤木四時不凋とみえたり盤ハ磐に通用せり○木曽にてハまんさくといふハ木て呼て寒あつひといふときハ中なもらふ○ときハの杜ハ山城也新勅撰集にみえたりときハの里ハ嵐山にありときハ井ハ拾芥抄に春日南京極西太政大臣實氏公家とありよて世に常盤井入道と称す常葉氏ハ陸奥弥四郎北条時茂の後也常羽御厨ハ下総國豊田郡也将門記にみえたり

ときじく　日本紀に非時と訓し万葉集に不時ともみえたり又ときじくともよめり時なくといふに同し臨時も同義也時ならぬも同意也万葉集によみし斑の冨じの山ハ時じくぞ雪ハふりけるとみえたり

ときめく　人の時にあひさかふるを花の時をえたるにもよめり○枕草紙に心ときめきするもの也しらる事にあつらぐ心の時めく意なり

ときのくひ　時杭也禁秘抄に丑杭以後為明日分とみえたり枕草紙に夜なかのなにかし時丑三つ子四つなどはるかなる声にいひて時のくひさす音などいみしうをかし子九つうし八つなどこそさとびたる人ハいへすべて何も〳〵たゞ四つのみぞくひにハさしけるくひハ杭を削木也といふにや

ときのふだ　吉記に時簡とみえたり禁中の宝物也新六帖に

うしみつとひさすらん月のかけふかくふすぶ夜の時のふだかな

ときまうし　奏時といふ也侍中群要に奏一刻左近衛夜行官人初奏時事とみえたり大嘗會記にも采女申時とみえたり

ときつくる　時の声をつくる也やうましにはとりを警といふ吶喊なともいへり

又堀川百首に

うなはらやせとのとの沖にゆくさるるうらこし舟にときつくるなり

○軍神招禱をしてまつるをを付つくるとらひ敵軍退散して神ぃ送
ㇾ奉るをいふ勝時と名くくとらつ
ゝつかぜ　時つ風ふつつ助詞五日の一風十日の一雨くらつゝとらひ
く万葉集よい皆海のまゝよゝえたるそだ漁のそゝるかゝ必風のおこるを
らふ也くらつ
ゝ処のこゝ　処字をゝそう孟子注よ闕ㇾ声くゝ西史記よ呼ㇾ色動天くらつゝそう禁中
ひく時をまつゝ処声よらひて時ㇾ色の義也神代紀よ雑詰こうをろよゝ口訣に
ゝえゝこう二度色と發するも習あるくらつて或ハ鯨波と訓を水静鯨波ズみく西土
の文にもゝえゝこう
ゝゝかゝを　古事記よ常石堅石と書日本紀よ磐石をおくまそうどをつ
ゝこいえ也こゝ反をもかゝをりかくゝをの略ふ
ゝとのとろ　日本紀よ四刻ゝとのう我邦漏刻の製一時と四よ分てるととて
也昼夜四十八刻蓮華漏よ同ㇾ
ゝとのきゝゝ　日本紀よ漏刻と訓ずり漏刻を伺ふく鐘鼓とうつ也貞観式ハ
凡知時以數示刻以鐘とゝもハ是ハ唐昏よ更以撃鼓為節黙以撃鐘為節とハ
ふよろづ更時也点刻也一説よ寅の一點よりふゝ一時を五つよ分てらふ也と
いつ
ゝゝうしをゝ　文選よ失時者零落ス源氏よ
いつうよをれ都のをとゝゝ時うしをゝひぐぬ　拾遺集よゝあり解て洗ふ衣の義也〇万葉集よゝゝ
ゝゝまうひぐぬ
うひごろも又解衣しもゝゝえゝうう新六帖よ
ゝゝうとふ浅まゝや戦うあうくのゝゝえゝうとふゝまうひぐぬ
ゝゝうけごろを　綿抜の衣の幸也
ゝゝうかゝおをうをやすりをを　復元ハ賤う麻衣ゝゝうけるかゝ
〈〉とく　神代紀よ解をゝまうふ糸緒ふくれらふをを也〇氷のとくるハ津とよ
ふよろづ又融怡とうまうけるとゝ同ㇾ又おこるハ解と同ㇾ説をよも
も解の義也論説の時ハ音せろ遊説の時ハ音ぜんやうるの時ハ税よ同ㇾ説駕
ふゝえゆ〇疾をとゝまうふくゝく及ふの義也趣も説文よ疾也とゝも〇土貢の音

ましいて国々より奉る土産といふ志摩國に土貢の嶋あり燒柄(タンカラ)のつくる也今
東宮にもいて○土公の音も呼ぶ
とぐ　琢磨といふは物を鋭する意なるべし日本紀に削もよめり新撰字鏡に
研をとぐ又砥をとぐ又瑳をとぐ石又桐をとぐするとよめり○西
偏にて米をとぐといふは淅(カス)といて○遂をもよめり俗に志とけるといひおほ
ありとぐるといふ是也進也と注せり論語の遂事をとけんしこゝにしまるはと
げにしまた也さきぐ朱註の意には非す
とくり　曇具理の義なるべし群砕錄に今人呼藏酒器曰曇と云え壜にも
似まり墨莊漫錄に東坡云新釀甚佳求二具理具理南荒人餅兒と云えたり膽
瓶と同し又陶器にやくり反き也下總の國にてはぐらといふ
とくい　源氏枕艸帋なるとよみゆ唐詩に人間得意人と云えたり商家に
顧主といふも是義也
とくせい　後漢書に德政不能救世溷乱と云えたり今いふ所の書は二水記永
正元年九月十一日今日為武家德政之成札被打と云え應仁記に彼借錢を破り

んとく前代未聞の德政といふまをいひ出ると云えたり
とくく　寛なる意にいて物ぶ解なり出たる辭なるべし万葉集にいとかひ
もとくと結ひ立田山と云え續千載集に
ふりかく涙顔の髪はかさみぶれとくとたのむる今日の暮かれ
又得々の意也とといて東坡詩に知是多情得々來といて○疾々の義とあり
俗にとうとといて○埃嚢抄に尾州記ぶ引く有女人容貌太註俗語德々志
と云えたり
とくなよし　日本紀竟宴の手に云也解由の義也格に如有闕怠仍停解由と
云え明律にも官吏給由少もそえたり
とくせにこ　神樂ぶに云えたり得選子也國史に淳和の朝大和國女孺多米
宿称當刀自女預得選と云也江次第に得選厨子所女官於采女中選其
人故得名といて
△とげ　簽刺ぶいふ鋭毛の義成べし竹木刺とも云えたり或はとぎといふ
とけい　自鳴鐘といふ蓬恩續錄に云也磁針ぶ土圭針といふ

いと慶長中日記よい斗雞と云えり〳〵といつる我方の拵製あると慶長十三
年の夏伊斯把尓亞(イスハニヤ)國より渡せ〳〵候始〳〵そこ〇水ごけいい五更漏也又狀
ぐけいあり香盤い無聲漏也又枕ごけい印籠ごけい根ほけごけいあり又三
年之一度ツゝ志りけるごけいと云ふ〇自鳴鈴あり同く國より渡せり〇自鳴鐘あり同く國より渡せり
〳〵〇ごけい草と呼者も纏枝牡丹也といつる始へがろんまごらひ〳〵ごそ紅
毛語也享保中始て渡ル西番蓮と名付け渡せり

〈ごこ　常ごもい時と云通て歳月移ゝ行〳〵も古今ごねごらふ也〇床
い處と云通て〇神代紀よ國常立尊を国底立尊ごもゝ今も底をごこ
やもらふ事ある也〇万葉集よ奥床よ多い睦(ムツ)育(ハグ)外床よ又い寢(ヌ)有ごゝゝも〇
人衆別よ上牀のやごこ称するあり轟也ごいつる舟にらふ答ごよゝり洞(ホラ)床
室(ムロ)床るゝい茅人の称するごの也〇秋の田のごゝづごいふごも兎設ごと書り下学集よ
ゝも〇床の浦い石見にあり海邊石ごゝゝ名〳〵ごいつる〇思の
侭の日記よごこ山のむさうりあれいごゝごゝるごゝごゝ人の油よなり〳〵る雪お
〳〵ふすゝごゝも、ごゝつくりごいてさやらよいごゝ〳〵ごゝ

ごこふ　神代紀よ詛をごゝろのうちらふごごこ也〇古事記よ今迄其詛戸〳〵らふ
ゝも其詛の術并よ其具もごゝごゝごれい詛戸い其處ごら也〇貞観政要の註り
請神加呪謂之詛〳〵ゝも咀も同〳〵
ここよ　神代紀よ常世〳〵書り天照大神の盤窟に隠れたまひ〳〵時よう歌うごゝ
詞あれい古事記よ常夜ごと書り正義あり〳〵所謂常世の思兼神常世の長鳴鳥
ふ〳〵是ゝり〇常世い國常立の世〳〵らふ意ゝり〳〵祝称也ごて顕宗紀室壽(ムロホキ)の辞よも
吾常世等(タチ)ごゝ人を祝〳〵てもらひ言事雄畧記の歌〳〵も舞する女常世ごもいもごする
もり〇日本紀中よ常世卿〳〵らつる皆僻遠の地ごを指〳〵不変の意ごを祝〳〵てら
ゝつて雄畧紀よ蓬萊ごを訓よごごこごらつて万葉集よ
吾妹兒い常世国に住けゝ〳〵昔ゝ〳〵よりごゝえまゝ〳〵ごゝ
後拾遺集に
古へのやごこの國やかりにごゝろごゝろごゝ
〇斎仁紀よ伊勢國の事よ常世の浪ごらつる神れのやごこの國るれい秋
〳〵てらふ也万葉集よ我國い常世よ遠ゝ人こらつる〇ごこよおごこやごこよおごこやごこ

橘といへり田道間守が常世の國に往て採來りしよし垂仁紀にみえたり○居の常世より来るといふ事髄脳なとにみえたり今常盤嶋より来るといふは是也胡鳫なといふ意なるへし元輔集赤染集なとによめる事みえたり○万葉集にとこよにたと吾妹かねくにといへるは黄泉をさしていへり常夜の義ともいへるなるへし書紀に大漸をとこつくにとよめるも此意也古事記に常夜往とみえたり往ハ月日の經行をいふ万葉集に常志へに夏冬往や又一年にふたゝび行ぬ秋山拾後撰集にあまつそらありて行つゝ年たかふもみえたり旧事紀に往常夜國とあるも謬なるへしといへり○三代實録に石見國常世國社神もみえたり

とこころ　地許處所とよめり彼ハ所に同し古事記に地矣阿多良斯登許曽とみえ昔經に居もよむ昔の我成功所と註に所在とあり前漢書に在所の語多く後漢已後ハ所在語多し韻学集成に方所者所嚮之方處所者指所在之處二者雖異其為所則一也とミゆ所を上へ回て讀ハ皆虚辞也助語辞に所是活字とみゆ詩緝に許ハ助語也とみゆ年所なといふハふるしの意也常居の義なるへし○禁中にいふハ案司抔にし記録所御倉所大歌所の類なり○国衙にも税大帳所朝集所健児所國宰所等みえ是を所々雑人といへるも朝所朝載えゆ○人に幾所といふハ續日本紀の宣命に二所の天皇としるされたり幾柱といふにひとし○和名鈔に黄蘗新撰字鏡に土蘗とも訓せり拾遺集によめり古事記にところつらともみえ也蘗蔓の義也春盤に用るハ所領の義をとる也本朝式に苞ともみえ漢語抄にハ野老と書て所出未詳といへり長鬚ある物もと名くる也類聚雑要五節殿上饗にもみえたり○あまどころとも称するハ蕨蕤也姫どころとも称するハ女萎也鬼どころとも称するハ草蘗也枕草帋にみえ也山どころといふハ和毋也字鏡にみゆ○氏に所といふハ東鑑にみえ野老とかけるハ後太平記にみえたり

とことハ　万葉集に常不止をよめりて常盤の畧也といへり或ハ平生とよめり佛足石乃歌に止巳止婆とみゆとハとぶかりとよむも同意也

とこづめ　眠瘡といふ床とつめしより發しる瘡なれハ床積の義なるへし新六帖に

昔絶くさのとふすねの床つめりうねよの乱を於やうそれん

とこやミ　神代紀に常闇又長夜とよめり梵書に長ハ常也と注せり

とこめづら　日本紀に永久とよめり人麿の歌におのかつまこそとこめづらなれといへる常にめづらしき義也鎮常ともよめり

とこしなへ　鎮常長字なとをよめり常しへの義しなハ助詞也常しく年と續紀也しく年也といへり鎮長鎮日も同し日本紀万葉集の歌にもとこしへとも見えたりなへの畧なるへし○終古をよむハ考工記の注に齊人言終古猶言常也と見え今より以来を終今とも漢文帝紀に見えたり

とこよのかみ　日本紀に芋虫を祭りて常世神と称して富を致すとて愚民を欺しまつらえたり西土金蚕の説を聞伝へて造言せるものなるへし　新撰字鏡に蠋又䖩とことよ虫と訓せり

△とさ　國名に呼ハ土左郡土佐郷倭名鈔にみえたり土左大神社ましますとゝてあへし其神ハ葛木一言主神にて雄略天皇の時に土左に故ありて移らせたまへる事日本紀續紀及風土記等に詳にみえたり○大同類聚方に土左藥みゆ度會之黨所和而祭宮次官藤原守勝上之朝方也其功治乱心妙也とみゆ○土左の冠者希義ハ頼朝の弟也蓮池氏希義を殺して土左を領を長曽我部元親又蓮池氏を討滅に

とざし　倭名鈔に扃をよミ常に鎖又関とよめり戸を扶の義也○とさぬ御代ハ太平の体をいへり文徳実録に時属聖運不閉門鍵といひ史記に門不関とみえたり

△とし　疾速も鋭利も義通へり霊異記に聡新撰字鏡に銛もとしとよめり○年ハよるも疾の義也文選に年往迅矢といへり左傳正義に年歳載祀異代殊名而其実一也とみえたり西域以五月為歳首酉陽雜組にみえ古今集にらしえあへしもとしたいへるもはきされくすなるよめひら○行年ともいふ春秋ともよめり○拾遺集に年もおもひもとしごろといへるハ豊年ともいふ也祝詞式に祈年といひ御歳といふ是也年ハもと季の首文穀の名也

とじ　婦女の通称也とじめともいへり晋書禮儀志に兼衣刀人采女とじとあり至と是なるへし倭名鈔の説ハ心得かたし建暦御記に刀自御膳宿臺所各別也とみえ○万葉集にをとじともとじとよめるハ老女の称也吾兒のとじなといふも是

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』 請求記号 837-48
ガラス使用

るゐ女とも称せるより日本紀よまと訓し三代實録よ妓人をとゞ
ともそろ薩戒記よ内侍所のかぐらゐ女官の称建武年中行事に内侍
所よ行幸ありてその御あそびのことゞもゑゑるゐかぐら自祝詞ふとよ也類聚
國史よ黒刀自黄刀自女るゐいつるゐ自称也日本紀よ壓乞戸(イデト)女ふとらつるゐ称人の
辞也戸(ジ)母ゐ戸主の意也霊異記よ家室とのことゞとゝろゝ〇侍中群要よ上刀自
取進之とらふ事ゑゆとも刀子るゐ〇刀子の音をも呼ま式よ長刀子短刀子あり
とゞざ　年木のふとゞぎろとゝもゝろゐ山人の春の用意よ新とゝろ
つむぢらゐ也儀式帳よとゝ大物忌の御年木初始とゑゑゝろ
とゞみ　蜻蛉日記よゑゑるゐ精進あゞりのやうとゝろ〇源氏物語よ御とゞみの
事済とゞゑの日ふゞゝゑゑたるも精進落の事るを細流よとゞみ年満也三代
實録よ太皇太后今年始満五十之算由是慶賀修善祈禱餘數又宴太政大臣
於内殿以満六十之齢云〇釈門正統よ年満二十をもとゑとゝろ〇仏を賀ハ四十
と光の始とすゐ四十より五十六十と数て老る身の礼と行也昭宣公の四十の賀
伊勢物語よ〇西土にくゐ皆正月朔或ハ立春とゝろ捷用

尺牘双魚よ四十以上百歳まで賀する文を載ろ皇朝ふくゐ淳和天皇の時
太上天皇四十の賀を行ひたまふことを初しゐそろ後君臣相共よ其慶賀と行
ゐせふゐ〇年國史撰集に従ゝゑゑたろふゐ其月と記せ〇年皆異まろ是其生
誕の節を用おまゐるもゝよそ賀と行ふ時をとゝそ花賀紅葉賀藤花賀紅梅賀雪
賀ふゞ名はくるかゝ一〇世俗よ八十八を賀するハ八の數ゐ我邦殊よ半ゞ止ゐに
て相まゝ〇たる年壽ゐれ仕曼を祝せるゝ一ふゐ〇其始を詳よせゐ或ゐ天宝年
中よ雲南の役よ殁(タヽ)ゝ男年廿四ゐりゝゝ命を惜ゝ已ゝ膺を大石とゝ手折ゝ古
今よ屏ゝ六十餘年を送ろ八十八まての寿を有ちゝ故まゝ堪ゝや(ヨヽ)まの年とふ
も栄の折字八十八ゐるをとゝまゝかゝとゝるゐゝもふゝろ〇生日を祭せゐる
ゐと天壽節とふ其事ハ光仁天皇の勅ゐ十月十三日曼脱(ヌカ)生日仍名此日為天長節
と類聚國史ゝゑゑ唐玄宗の生日を千秋節とふゝ年唐書よゑゑゝろ
とゞゐふ　年次の条月次日次ゝゝゐふゝゐ〇ゝ妓ゐ多ゝ波に書ゐろ
とゝのと　万葉集續日本紀の宣命に年緒ともろゝゑ長ゝ絶ぬ意又むとゝゐゞ
属けゐ緒ハ年ゝのはてゐことゝふゐゐ西土にも心緒愁緒

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

るくの詰あり又年の尾の字もよくらくらつ

うたま　歳賛とらよ年の賜くものを暑せ一物なく一今年をもつて音にもらて新年載

集

諸人にたまものすくしまきの初めのりくの豊のあるうへ

らうろ　年寄の者老人をらろ〇年寄職名よめうしへ後世の事也上下よ通し

て此称あり西土よ耆老とらふもの一郷よ二人つゝあり老人くとらろ〇まち年寄へ坊正也

らつろれ　瑯琊代酔よ准人歳奠家人宴集曰寿散とうえ東坡う詩序よ曰俗歳晩

酒食相邀為別歳くとえくらう禁裡よてもこれをいふまも也

らうぐんまろ　祈年祭の訓也周禮よ祈年の豊年を求る也とうえらるれえ

祝詞にも二月に御年初将賜とも説文よ年へ穀熟也しらて今伊勢参宮に

年越詣といつまへ此事よう謬れる也一祈年祭へ天武天皇四年よう始れ

るといつく崇神天皇の御代に始るとすれ一類聚国史桓武天皇延暦十七年

定可奉祈年幣帛神社くええらう〇寛平九年格よ二月祈年六月よ二月月次

十一月新嘗祭等者国家之大事也訣令歳災不起時令須度預此祭神京畿外

国大小通計五百五十八社とらう延喜式よ祈年祭神三千一百三十二座とらつり

思の侭の日記よ祈年数奉幣とえゆ

△とと

△とせ　一年二年よう万歳まてかくらひもつとしの約せる也万葉集よう

の八とせ伊勢物語よくのとしせとええよう

△とそ　屠蘇へ元日よ献る酒の名内々行事れ二袋紅糸切よく立すかしれ鱗

形よくて柳の枝よ系よくほる白散へ刻ふるし御銚子よ入らふ又大神宮

式儀式帳よる白散のこれく屠蘇といふ内宮年中行事へ屠蘇をあはせ

て今二宮の白散へ米粉を用ることもふ也是古、椒酒の遺意也建武年中行事よへ

神明白散とええよう二献の時也三献よ度嶂散と供て御菜の儀式へ三ヶ日也とえ

ゆ屠蘇へ延喜式よ委一唐孫思邈よう始りて菴の名をとらく酒よ名くことも又羽

帳の名也一もらふもろ本字へ屠蘇也とらう又幼者へ年と得さことをたらてれ

老人へ年を失へ後もろくのむよ一時鏡新晋よえ盧柳南へ歳始よ不遜と数るよ似

ようとらひて自家よへ長者よう飲初歳晩医よう人よ屠蘇袋を送る事へ熙朝楽事よえ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

えらう弘仁年中より始るこそ

△とだる　古事記ニとだる天之御巣ともゝ百十足の義十全の意也出雲風土記ニ五十足天日栖宮ともゝえ万葉集ニ百足の語もある也しらう

とだえ　跡絶の義ニて間断の意ニいう或ハ倭姫ハ世紀ニ太平記ニえゆ○後拾遺集ニあやふ〳〵ことゆるとだえの丸木橋〳〵とよめる古歌ニ混説するハいふまでもなき名所ニ出す

こゞち　鷹狩ニよめる鳥立の義也○とだちの原ハ名所ニ出す

どだい　土代ハ朝野群載国務條ニ四度公文土代交替ニ名庭訓ニも草案土代とあり

△どち　万葉集ニ共字ハ友ニよめりみどりこまちをも今俗どち〳〵ニいう又ニ細すゝきまねきハ即胴亀也ニて尾張ニ著ハ〳〵ちの鏡ニふ伊勢ニよどんどめるニこゝち更ニ結目の義也紐の意ニいう新撰六帖ニ五位川の岸ニよるかいさゝちニいふ櫃を捧ニくゝどちるニえ義

△とづ　閉ニよろ門ニとぢ沓ニよろ鞋ニよろ海ニよろ○新撰字鏡ニ図をとぢかさぬと

よめる固ニ注ニ綴ニ注ニ又縅ともゝ

とつぐ　日本紀ニ嫁継ニよめる○帰をよむ古訓也さればニ公羊傳の注ニ婦人以夫為家故謂嫁為帰とある字のまゝかゝるニ○

埃嚢抄ニ點をくぐとつぐニふ阿弥陀秘密讃ニ伊字點側都々二點置

一大般涅槃義一方便神通義ニよめり

とづく　日本紀ニ達ニよろ重之集ニも常ニ届ニよろ

ふしらぬ達の意也

とつや　日本紀ニ宮ニよろ帯律宮の義也万葉集ニ

月と日もかゝる山のふしつゝもやゝニよる三統の山のふもとニ

○外宮の号ハ古事記ニえゝろ内宮ハ内裡の内ニ参ニくく後外宮ニ参ニろ御祭故ニ

○大司長則朝臣記ニ正月元日内宮ニ参ニろ御祭

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

古故ありて外宮前日にある也と云々

こうだと云ふ　日本紀私記と鶴鴒と訓せる名あり和泉式部家集と

世中をおほせるのがしこい人と思ふ

△とて　とりての略也日本紀竟宴の辛まとうの御世と酒すゝめてあうしとうそう

真名伊勢物語と左とうむいた自由ふるまぬ故外手とうふ也

とてとあうてとうそうとあるくふ意也○とてもかくてもと云ふ詞とうて俗と迚字仮造もうそうそとかくてとて残暑しとてとてとてもかくもうとかくくふ

ふ同じ

△くそ　児女の語と魚ばらふ芝拳類説と南朝時魚為斗と云ふうう韃靼語也

とうう鳥ばらふ重ねる也手ばてくとらふ如し○俗と云とらふいちくと音通す

稗史と参参くとうう南部の信いらよいとらふ長崎とうそうくとらふ○菅清公記と信と跡とくとらふ尾張國と川の事とうう埃嚢抄とよゆ

ふむ　留止ばよありとぐさ自然とらひくめるいと自己とらふ皆むと友とうう駐とよめ

△〇人仮設くとうそうとうとうとらふいと其事曽我物語とうそうく点止矢ふとくとらふ

意也

△とぐろ　神代紀と鼈の字ととうそう皇代紀と迹驚の字ととぐろをくとうそう代表ある

と万葉集と動字響音字又動響又動々ともうそう空もとぐろまくとらひ古事記と伏汗気而踏登将呂許志くとうそうそうしてくやしにするを也天のふとぐろとうけるも同じ轟字とうそうも義通うとぐろけるとうそう家くもうそう新撰字鏡と雨もようと碁又碆磕又噴嗽又嚼嗽又驫とうそう○甲斐の郡名と等力ととぐろ記とよそう音の将せる也○とぐろ記の杜と出雲とあり橋ととうふくとうう○とぐろ記の杜と出雲とあり風土記とも○とぐろ記曳あり

とうふ　常と調ととうそう神代紀と整頓二字とよくと推古紀と齊ととうそう○今物買

くとうふも通せう○名と源等ととうそう聲等の義也

△とうふ　日本紀と唱字ととうそう音ふとうふの略語也新撰字鏡と啡ととうそう○物と

よむと漢書の注と行示也くとうそう今うとまるくとうふ也とうふとうそうとうふとうそうとうそう

とあり　隣とは戸並の者らび及ぶ也しらつくまでくるを隣あるを
里人の称とみるべく住家のらつくまでくるを孟母の三遷とは云也〇隣のふえ晋向秀が夜
五家相保のある一〇隣とかかるいまだ笛を聴て亡友嵇康が事をかなりひ出せる故事あり
とふとも　日本紀に醫帖とも曲醫堂とも書り蜻蛉よりは後嘗の義也蜻蛉を雌雄ある
尾を銜くわえて飛をらむ也又一つの尾を銜むてみづから止るもあり
とふご　伊勢内宮に仆事あり鳥名子と書り延喜式には鳥子名儛とみえ儀式帳には
とをろえたり元々集に今世号鳥名子則金鶏長鳴縁也とも俗よひよくの条
ともらふ野篠村牧野村原村山神村の四所より勤難のまゐりて笛を吹て石坪を
俗ふ三祭禮竟宴の為也
△とにかくよ　三代實録には左右とよそうとかくよ同じ万葉集にも左も右もとも
又とかくよからんとも又よかくよかくよとも意いとよそうとも
△とぬ
△とみ　侍中群要には散位とよめり公事根源には大節には五位を上るも真名
名目也此辞は勅のまゝに動のまゝに有位以下にのみとりてこゝにあれば古今の通規也しらず西宮抄重陽裏
書には大節には大夫とは五位を小節には侍従とは如儀式とは云ども官職ある人とは貴賤と
とはらふとぬ〇祝詞式には陸國六縣の刀称男女より至るまでとは朝野群載には掾
非違使廳下刀称職事とは又刀称職と補任には左京職の条には保内宜義知
名を季部王記には百官主典以上称刀称也とは諸の長上の官とは主典以上は皆
長上の官也殿寝の称脱近の意あるべし〇又蚕のとは山のとも里のとも
庭訓往来には淀河尻刀称とも見えたり今も信濃にては田を植る男とは
とは後世には貴賤ともに公に仕まつる事ある者とはいひ里長防令にも
も刀称とは後拾遺集神祇部の端詞今昔物語も里長とも又西京の刀称
とは防令には人とも書り辞也まきすけ五節の條にはとも見
えたるに〇紫式部日記にはとも書るも刀称事とはあり
一〇鞍馬の敷の天神の神職の者を代々刀称呼刀称物語にはとも
とは伊勢神宮にもあり一年内宮年中行事には遷

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

山城の賀茂より今作存せり○又○川の上野國利根郡也三大河の一つ也源顯家
の足利義詮を破りし取也新勅撰集よ
さゝもけの油こそやもえそ○川のゆ石をふむ○もゝかゝしよ
ちはやぬをめと誤り給へるなり○今神宮にて六月十二日九月十二日十二月十二日刀称御
ほうきを掃除ことゝいふ
と訓り　舎人とよむ事ハ禁中に宿直し守護する人ぞ後に
いへるの称ぞもと後漢書の注に親近左右之通称とこゝえたり
日本紀に近習舎人とこゝえ帳内兵衛などを訓せり親王に賜りて諸
臣に賜りなどを資人とふ○舎又音せき釈と同し釋菜るこゝゆ○内舎人大舎人
中宮春宮舎人近衛舎人おやあり一書に近衛舎人於近衛府中将曹府生番長近衛
等皆謂之近衛舎人或謂之随身とこゝえたり○塵欽に小舎人ハ殿上童とあり
こゝえ鳥餘情に中女房の名具する童と小舎人とらしたり○牛車より出入史秦
紀の注に舎人を立蔀内小吏官名とらふよりて東
鑑に御厩舎人とこゝえたり今内舎人の府屬總て舎人と称して常に洛外にいでゝ
市原鞍馬の邊に耕食して官牛を飼とらふ○大和國添下郡の山田村の西松尾寺
矢田村の属邑東明寺に舎人親王の建たまふしと伝ふ東明寺に紙銀泥の法華經
あり伝ふ親王の自深とらふ

へとの　殿とかきて官殿の御大戸道等ふ始ゝし神代纂疏にもこゝえたり
名よりにや又戸名のごとし○宮中に諸殿あり〳〵各其名ありて分ていかく呼ふ
ことをしらねバ草殿釣殿柏殿渡殿ゐしどの西○伊藤氏の説に石
林燕語に五鑿與陳伯之書謂臨川王宏為臨川殿也とこゝえたり我邦貴人を称
して殿といふも然ふ山ありやまいふ海人藻芥に内裏に於く人を指ゝやんごとなき称
家の外に不可有之御前に於く関白殿構政殿とやもとこゝえたり○殿法印良忠の
関白良實之孫なるとゝもにまたゝきて物語ありこゝえたりて全軍兵制
に丈夫と譯せり又情人と訳せり○今殿を指ゝて呼ひ将軍家を指もよて殿中とい
ふ将軍家に限らず○殿閣等の屋にある敷ひ嘲風也○殿野村吉野十二村荘にあり
殿堅兵衛の宅あり
とのい　日本紀に宿万葉集に侍宿とよめり殿居にあるべき宿直も同し昼よ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

直とらん夜に宿といふ文選注に直ハ謂宿禁中以備非常也といへり殿寝の義也
寝といふもあり

とのも　主殿とよめり日本紀和名鈔にとのもりとよめるハ略語也寮ハとのもりのつかさ
とものみやつことも見えたり

とのゐ　禁中の外衛也百寮訓要抄に宮門の外を警固する職也といへり○との
ゐする身といふハ左右の衛門の陣を守る官人をいふなり○外の衛ハあふちが
もとて夫木集にも御垣守外の衛にたてるはあふち陰ともあり○一説にハ外
重中重内重なるをいへしの字の仮字なるべしともいへり

とのばら　栄花物語に殿腹の義宮腹などいふが如し大臣の室の腹なる
君たち姫君なとを流本にハいふめるを後にハ常の男子をいへり

とのうつり　草紙の名枕草紙に白殿移の義御堂関白殿新殿にうつらせたまふ条
徙しうつりたるよしの也といへり

とのごもり　万葉集に殿隠とよめる歴居(りやこ)者といへるもあれハ中臣祓の天のみか
けの日のみかけとかくまうしても讀ハ非也ともあれして讀べしといへり

とのゐもの　宿直する臥具をいへり○とのゐ物ハ袋源氏に見ゆ宿直人の名字抄に衰
に出けるといへり俗にいふ蒲団袋也

とのゐすがた　直衣着たる体をいふといへり又とのゐぬくもりハ衣冠をもいふなるし
ハ御ゆるしありて宿直直衣すゝく主上の御前へ出仕し侍らふ事也宿衣とハ
衣冠のこと也といへり禁秘抄聽雜袍と見えたるも是也

△とは　とことはの略也万葉集に常不止(とこしへ)とも見えたれハ略語にて物のやまぬ
ことに轉せる故に不止をよめりとおほえしにかはるとかゆる○古今
集に山城のとはにあひ見んとよめるもときはに常盤を兼ていへり結語にとほしといへるハ皆
よみかへりていふべし

とばり　日本紀に帳をよみ古事記に幕をよみ倭名抄に幌をよめり常に幔とよめる戸
張の義也今いふ暖簾(のうれん)の義也○雲のとばり霧のとばりなどよむハ見えたる也○とばり
あけハ褰帳といふ玉葉集に今上御即位の時大納言三位とばりあけたまへて上
階して侍りし時よみ侍りける
たちかへる雲のとばりをかくしてやくものうへみくしのかひもあらなん

とぐかり　詞よいふかゝるをとぐろうの条也○とぐろうえつるとぐろうやとむるよしいふ

りつのそあゝ〳〵ちう細流よ時ゝうつのそあゝ〳〵ちう後拾遺集ゝ

るゝ〳〵ゝ明すのあゝん秋の夜いまてうゝまでのとうりとだゝ

とりどめぐさう　源氏物語ゝ不問而自談也千載集よ

つゝめゝと焼ねりひよるゝあれいゝとうりのせやなゝとる

〈ゝとひ　閣漏とゝ戸覚の条成つゝ東鑑よ槌次ゝうゝ大鏡よも〈ゝ〈ゝよ槌ゝけ

てゝ待ゝゝとあ

とびら　和名鈔よ扇又扉とゝめう神代直指枚よ左右相合とゝびゝゝとゝひつゝよ戸

ゝとゝとゝつゝ戸枚の条成つゝ新撰字鏡よ摺又開とゝめう又圖会門のゝとびゝゝ

ゝめりゝ

とひや　間屋と常よかけうゝれゝ倭名鈔よ郎廷つやと訓せうことふ反つ也一説よ

集屋（つどひや）の畧ゝゝとゝう

ゝゝのと　車にうつ著用集ゝとゝとゝて鵄尾とゝけうふ韓ゝとゝとゝとゝ

とゝとゝ頌の緒ふゝも書う

〈ゝふ　古事記よゝ西向をゝとゝう霊異記よ諸とよむ外言めの条也ゝとゝう借向（かりむき）と

いふもうつゝおふ意也日本紀よとかゝゝとゝ

ゝふゝもようとゝとゝふを略ゝたる語也○亡人のたとゝ厲福するをゝとゝふゝもとゝ

ふゝゝもとゝう追遠の条吊向のそあゝとゝとゝふゝもいとゝ新千

載集よ

天つけきゝとあるをゝとゝひけあゝゝとゝふ宿の法乃むゝふ

又新撰字鏡よ低慣とゝひみゝれゝとゝとゝる

とゝぶ　飛ぶめう疾く経るの条成つゝ

ゝゝぶゝ　顕昭説よ梢をゝとゝとゝとゝう今ゝぶゝ（カヂ）梢のゝゝぶゝ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

ハ七ツ八ツ枝といふ也後拾遺集に

　あれにしふ都の花のとふさゆゑ君もしつ枝のしつゑあらし

是ハ枝にむかへくとぶさといふ也一説に私人の木を伐る跡におこる木の枝を立

立をいふともいふ是其伐たる木末を折しくその株の上に立て山神をなぐる如へ

し今もしつするのあり太殿祭祝詞にも本末とハ山神にたむけてとゝえたり

ともいふ散木集に

　卯の花も神の立しつ紀とさそてしつとぶさもたるにゆふかけくゝ也

○万葉集に鳥総立足柄山に舟木伐とゝえたり鳥総ハ伐ぶさ空訓をふる此翼を

立てくゝ飛んとするに喜く足軽くと属けくる也○謡にとぶさにちるゝ花ゆのといふ

るハ飛さまを略したるにや

とぶひ　日本紀に烽をよめり烽燧ともいふ西飛火の義也万葉集に射駒山飛火が

くるにふとゝゆ史記の注に飛火曰熛とゝえたり飛ハとぶさといふ如へし欲に是日

聖の飛火の聖なるとよめり是日の烽ハ元明紀にゝえて今飛火の山といふ鹿野苑

の東にあり又河内高安烽高見烽高見ハ峠村の北にあり是射駒山なり又茲雲隠波

なし史にゝえたり

とふのすがごも　目を古に編たる菅薦也といふよて海道記に七編のこともむしろと書

たり一説にかや筵なるハ簀茅薦の義也といふさまハふハ射字の義如へし今も俵な

とに一のふ二のふなといふ又節の畧にや日本紀の欲に八ふの柴垣ともゝえ古事記に

ハみこの柴垣やふじまりこもいふ弥節ぶえの義也今も垣と結にハ幾ふしなと

いふ其薦を出ハ所十府といふ陸奥にあり八雲御抄にゝえちれくに限らず但馬

なるとふのすがごもやともよめりと宣へり又ふハ經の義なるへし

△とゝ　俗にとゝとなしといふ十重廿重の義也

△とゝかる　古事記万葉集にゝえ日本紀に徹とよゝ者に通とよめりらりるしろ

さしすせそ二行にてとゝくらりり神代紀に洞達行去もよめり名に融とよ

み霊異記に通をとゝしてとゝえ貫之の欲に蟻通とありと星といとよめれ

いとゝかるにハあらず○融公を嵯峨天皇第八皇子にて貞観四年に左大臣し

なりませり○禁中におしゝりといふとあり○通里といふハ二條通三條通のこ

とく通途といふ也伊勢度會郡に通村あり支木集に行ゐのとゝりの里にはそき

いふてとよめり

とほし　古事記万葉集にも遠をよめり無ると義同じ後世とほしと云ハ
とほくしも万葉集に見ゆとほさかるといへる遠之也と注せり○篩をいふ也
通と倖に用る詞也全浙兵制に邊箕と譯せり近世萬石どほしあり風車也

とほおけ　倭名鈔に遠射又投壺とよめり万葉集に投矢ともいへり神代紀に取矢
還投下也とみえたり

とほひと　仁徳天皇の武内宿祢をさしてよませ給ふ御歌なり
汝こそハ世に長人のみことの意也古事記にはよれるがのなくみえたる世に長き人也

とほざかる　万葉集に遠離とかけり

とほしろし　一万葉集に河をとほしろし野をまろくしてよめり欽に遠白体あり是ら名
鈔にはとほしろくよげなしひくくしてたけたかくとほしろき也といへり神
代紀に大小之魚をとほしろく小さき魚ども訓せり細嗅の魚をまくとよめり白
くしゅるとなふ也し

とほつおや　日本紀に遠祖とかけり公羊傳に見えたり又上祖又始祖又本祖をもよめり

○倭名鈔に高祖父を訓せり文字集略に五世祖としあるハ俗にいふひいおほぢ也

とほつかみ　万葉集にとほつ神祖をよめり
万葉集に遠神吾大きみとよめり神代のおほきみといへる意也一説に
ほの人とちかくよもずらん人倫に遠きと解するはあしし

とほつあふみ　倭名鈔に遠江とよめり淡海の義也抗草紙の説にはおほうみに対して
ちかつあふみといへるにて遠くあふみといへる通音也反たまえあふ也万葉集にとほたあふみともよめり
遠江よりも皆音のはじまりたる也神名式磐田郡に淡海国玉神社とも白く国
に湖ありしが永正七年に地震洪水の変ありて湖海一に通せしより今ハ名付て
ありしを山はまことに宝螺の如き海也今切の海といへりとくハ兜鍪の詩に左ハ
海右ハ湖同一碧長江合含両波瀾と作せり

とほのみかど　万葉集に見え遠き國の朝廷といへり太宰府を云ふと成ハ指り文韓
國を指也

とほやまどり　遠山採延喜式に見え餅菜拭にもぬるとのすりの多くまと山をす
ろくの名をハよめるりそとも見え又たとへば山ほのするをしも見えたり後に山の名あ

つゝ延喜式にゑえたり又雪の毛をかへたるか中に若鷲の毛ゝにおしたると遠山毛といへり

とほかこえみたま　三種の大祓の辞也江次第に水火神人土に配当せり神世五行の古語といへり家貴ト傳の書考へ着し又遠神善視賜の義えいよしの古語たまへたまへなりまへ久ぬ

とかきはくなのか　花の香ハ遠く聞によりしよて近く押れハ貴からぬに譬へる諺也教民要録に美不美郷中水親不親故郷人とゑえたり拾遺愚草へ

とへりしれ立枝ハ梅のゑえすかもふかひとこそくさ霞りハ

△とま　神代紀倭名鈔に苫をよみたり船にふきて宿る物なれハ名くなるへし舟に筵といひ車に輦といふも同し説文に苫蓋也徐説に編茅也と見ゆ○新撰字鏡に萇をよみたり萇楚似桃者と注せり又葆をよみたり

こまは　留字ヨよりはまるの轉也とまるといふ時ハはゞまるといふ事ありて中臣祓の神留り坐を續日本紀にて神積坐とゑえたり○宿泊なとをよむも留の義也

とまり　倭名鈔に泊字をよみたり宿るを俸といふ也日本紀に浦津二字をもよめり泊ハ海路に就ていへり草菴集に

おきはれ風吹にまるせくくとまりやいする

許梅屋か詩に黄帽貪程夜泊遅とゑえたり黄帽ハ黄頭郎なるし○和名鈔播磨國大輪田泊と出し雍州の百頃泊岐州荷池泊を引り○琉球泊村乃漂船安永乙未の五月に志州鳥羽浦に着り

こまりせかくまれ　とをあれかくをあれ也をあ反波也とかれ物語にとよまれたりまれ

とゝとゑえたり

△とみ　冨ばよめり田実の義なるし一説に積也財ばつむばらふといへり○万葉集に跡見の波か辺又跡見すゑおきてといへるハ周礼に迹人と見え迹之言跡知禽獸處といへる是也○冨米といふ姓承久官軍の將也○鳥見丘城上郡外山村の上方にあり

とみに　頻にといふ義をとりて訓とせる也といへり物語に多し蟬文の例の如し

又速疾の義を待るへしみハ詞也といへり

とみくさ　富草と書り蚤壁坎よ稲をらふしつゝえうろれい相撲家集よ山ゐるとくさの花とらん詞花集よ

ナヒもてくる倉ひよけむくのいあゝゐる世のゝみてくのゝれ

とよるゐる山よそあるよゐゝれる倉ひ伊勢外宮のひ也〇近江多賀社そかつてを

ゝの木とらり〇玄玉集よとろ草ひ擡也ゝもらつり

とみかゝみ　真名伊勢物語よ左見右見とゝえうう方ゝ誤る也

とゝの波らへ　富小川ゝもり源平群山よう生ゝく法隆寺の前次はるゝゝくゝうるやゝと

みの小川ゝ作ると太子班鳩の宮よ住ゝまゐ波りて也さんゝ妙欽太子傳よゝえゝく日

本紀よ載ゝとみづらひと誤りれい心得ううくゝゝて法王帝説よい巨勢三枝う欽よ

せう實を得ゝるみる一一

ゝゝ波たまふ　賑給也五月よ行ふ政ゝく朱雀勘文よゝらふ事有貧者ひ富

ゝもる意也〇近世神地佛場よゝく行ふてよみゝらふまゝと此よようる名ゐ

ひ一一富法ゝゝゝらふ見也

〈とら　留字ととゝむとめる也めるゑむ也〇認字ととゝむいまだ皆ゐゝえゆりゝむの略

ゐる一一

さんぐゝ　續日本紀よ頓宮ゝゝ百今の民姓ゝもらつ太平記よゐる大葉雜記よ海西驛

置一宮為停頓之所ゝゝえたり其時よ臨んて搆ふるかゝやうり

さんぢら　記錄よ屯食ゝ書り下臈よ雅よ頓ゐ是食也置食之所ゐ頓ゝうう物語よゝぢ記ゝも書り源氏帚よはゝ

しひ也今のそのまゝ同ゝとらつり〇鈍色ハ僧服也海人藻林よ俗の狩衣ゐみゝゝゐ

さんぢり　江談抄よ井ハ異國の俗り字也延喜の御時渤海國牒状よあり其後和訓

をさんぢりゝつゝゝえゝゝ實退錄よ井ハ東敢切以石擊水之音ゝゝえんゝり

今の氏姓よ苒よ俗ゐ此義ふゐゐる一一〇毋の名よもゝり〇津輕の辺よ蜻蛉をぢんぢ

ゝらふ信濃そぐゝらふ杜詩の点水蜻蛉款々飛の意ゐる一一〇料理の名目よと

ゝう洞津のあゝゝそれ太々神樂次勤めゝる後のゐるまひゝゝゝり

さんかつり　翻筋斗ゝらふ也ゝうう

せゝらゐ事ある也或ハ斤斗よ作る祖庭事苑よ斤斛木之具頭重而柄輕用之則斗轉為

此伎者似之ゝとえゝうう擊斛の術よゝんぼうかゝ水車ゐゝらふと長也又疏鞠よも

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

しつる蕃廼集にえそう小兒の戯よりやがてつくゝほうの轉せる也○手調の調子ととゝのふ名ごほ手あり

〈と云〉 神代紀に姚をよそう級長戸邊のごとも同し○皇代紀に荒河刀辨新幡刀辨ともたゝなるも同詣ぬ一又刀自女の中畧ともたゝめの約ち也ともいつ三議一統に小手より始く左ろう進つと上帯の後よりあげ合するくゝめ高組成懸ろ成らつゝめる一

と云こう一 認来かしを希ふ之西行法師上賀茂西念寺といふ寺に住一此庭前の梅をやう一てうめる歌に

と云こう一 梅をうめる我宿どうやらも人がうようれし

新古今集に題をくれて人ゝうれしく今朝しもあこがしの梅とそ名を於ろうそそ

ふを花肆ごとめこ梅ごふ八重小輪の白梅ありつ

〈とも 共倶與同偕併竝両ふことをよう云ふ一雖の字の義にいつ雖い設両之辞と注やう一如一万葉集二十方をよそるその義ぬ一一〇そうらさくもらやこりくもこりぬ源氏よあふこりくもこりぬそうの歌い

そうくらふ詞也〇公を名ゝよとりことよそえるい公共の字朝も朝廷の字公しかよりよめる如一ごいつ上ありきことよう下いもとも奉公の字如一比等倫類群僚ふとも多通せり〇朋友い諸共よするとのるをいよう故人も同し一真名伊勢物語よりことをとする人ら縁友ごろる人ら従友の誤写ぬ一一〇人い善悪の友ごようごふ負観政要よ人相與處自然染習すゝらつ昔家の教よ

おうをまうくるほくごとも申ぬ一一〇知を名ごそともごよむい新知舊知知已ふやの字にようくらつ五ごよむい仕通つくよそる如一一〇日本紀よ部類の字同し一〇大伴をともごよむい淳和天皇の諱を避るよう勅わり大伴い武官也よそうら物語よもふくものほいとのごえたう〇後者ごよむい日本紀よも係ふよう係仗い鎮守府判官の官人也伴ふのふるもい上よ同し一海東諸國記よ伴従人ごえ全漸兵制よ小廝を譯せう〇艦をふふい舶の後頭ふをい後のふく艫ごともいふ倭名鈔の説よて舳如一ごうろう小水雅集韻是也新撰字鏡よい舳をごも艫ごようろう日本紀の点よ同し一文選の注説文ふごと也〇靺い手面のふて如一一説よ大伴氏の祖の

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

造る不みるとそそともやらふ〳〵もらう九まにうけて弦をさくる物うて鞆音みゝらひ
てるとの〳〵ふえうら壜嚢扱うも今世ともまう〳〵さゝくつよい名と用〳〵とらつて續紀ま
鞆張とう四日本紀ま坪字を用ねたまうるい據ある〳〵字彙補ま出せりと義を欠
日倭名鈔ま駿をよろう切韻ま在臂避弦具也とう四神代紀ま高鞆あり八雲御抄
ま九ともまあり今たゝら〳〵訓せるい柄と謬りるひやらふり〳〵武用ま熊皮神
室ま鹿皮のよう〳〵延喜式ま多そうもれい征器〳〵神器〳〵異あう〳〵ふえゝく兵庫寮
式にゝふうす法ととて吉部秘訓の号のゝく制る時い征器〳〵ふえたう伊勢神
室の鞆い其形窪杯のゝくにて巴を画ゝ〳〵ゝのく描津住吉の神室もうゝ同〳〵ゝ
らう〇後世鞆と用かとよて鉄蓋〳〵ふ物と造る九の手面よあつ後又木ひて造
ま木魚の如〳〵とらう〇備後國の地名ま鞆あう〳〵鞆明神ま〳〵神功皇后
の鞆とて神躰とゝ〳〵らうも九ま〳〵吉部秘訓ま出せる〳〵全く同〳〵〇鞆園
い山城ま訓郡にあう〇韘子い蠔とう〇鞆音の事古昏ひえ内ま竹玉と入て皮うて
色も時い能みるゝ〳〵らう

とを〳〵

乏字をよろゝとゝ〳〵ともう字ま乏ま〳〵ま稀女の気也万多ま文ま乏〳〵ひ木人

乏もるゝ〳〵る希見の名にう〳〵ふ佛足跡の欸うもあ〳〵のやう〳〵さゝ〳〵ふろう〇倭名
鈔ま照射とうろう新撰字鏡ま撥とも〳〵ゝとうろう違志の説あ〳〵ま之の下ひゝ四九
月め比鹿を取ん〳〵て火申ま松とやう〳〵て待居〳〵鹿のう〳〵まを射ゝ〳〵らう継齊
座右の注ま〳〵〳〵狩い鹿の眼ま火の光のあふとまを〳〵ま〳〵ま新拾遺集ま

復ひやいやゝ〳〵の衆ひ目をゝともあらせあねじゝめゝ〳〵ひる

とを名

江次第に乾繪〳〵書う鞆の面ま繪うく文也今鼓面ま長〳〵も亦同〳〵〇江次第
新嘗會装束次第に横立辮髪ま五懸巨腰額不隠鞆繪ひらう杯ふ釘隠〳〵の事也
〳〵らう應永官符ま戈のまひも金銀鞆繪二枝弘一尺一寸四分〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵う〇巴の字とゝむい鞆
繪即巴字ふまい事訓セ〳〵也三巴記ま閲苑白水東南流曲折三廻如巴字故名三巴とえ
ゝう世ふうぞとゝ名とらふもゝく瓦口ま巴文を造ふ水ふまと彫も同〳〵く
火災と防く事也曲水の宴ま巴字を書て水ま流ゝ〳〵ゝ管家江家の詩の序にも四季物語ま
もえゝゝう先もあゝくうゝふの事にふる如一

かゝふうん巴のまけふたゝえゝて〳〵まゝ〳〵ゝるゝるのゝうゝ記

〇戦ま巴字ま追まうゝ〳〵ふまゝ〳〵昔物語ま入う〇天野氏の説ま樂の駄太鼓左

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

方に三頭の九巴右方に二頭の右巴也さるに雲雷の古文字より変じたる乙雲雷と云回るも書
て雷紋を俗よりみつまるくひ雲紋を給ようづまた巴くるふ巴の字と鞆繪くともむも水の
渦く象るまた雲形と用ゐ〳〵ある一〳〵とかつけるも鞆も敷るも音をもるるとて雲
雷よう敷ゐる如〳〵雁卵も詩云酌彼金罍々有盈雲雷之象以金飾之といふ〇幕の
紋よ角巴くらふまた唆嚢抄よえそうよう〇巴大將ハ藤原公經公也家の車よ鞆繪
を畫〳〵よう呼ぶ〇木曽義仲の妾巴女大力なる事人口よ鐫炙後和田義盛の妾〳〵
なる朝夷三郎を生てくらふさん〳〵事實合て義仲よ別るゝ時年二十八木曽七手組
の一時にく功あり後尼〳〵なる越後友松よ居ゆうるゝ〳〵れ十一歳といつり三條
河原の戰よ童忠迫く巴ら鎧の袖を捉巴鞭て蓄馬騰て袖斬ごいつり朝夫義秀足
利義氏を追〳〵其鎧を捉義氏馬を躍らし〳〵淫を踰鎧の袖斷も同日の談なめう
〇巴ヵ嶽ハ吉野大臺ヶ原よあり巴ら渕ハ其下流なり〇とゝ鞆繪ハ鞆のうつを画か
けるなり〳〵

ここらや　万葉集の得物矢をとゝろ狩矢をとゝろ新六帖ともあめりさ
つやこゝもとゝろ

とゝす　燃ゆるよめり留る義也とす支む神代紀よ挙ゆるとゝす
ととだち　伊勢物語ごこも支共の轉せる乙友共ハ万葉集よえゝろ日本紀よ同
伴河訓せり
ともゝ沢　日本紀よ鄙をとゝろ舊事紀よ伴領ごえ古事記よ伴緒ごえ祝詞
式よ伴男ごえ万葉集よ伴雄ごええ部類の多き人とゝろ一つの緒よ數の玉
と貫〳〵よ譬つく共の緒〳〵ら〳〵ら〳〵ごいつり男ハ借字にく女神もまごまろ云てゝ
人と何まの貫属〳〵ひ殿上の貫首〳〵ら〳〵貫も意通ハ伴緒と書を正し
ともがら　神代紀よ明友をとゝろ共離の義相共よ扶持する意又友ら君の畧也
〳〵ら〳〵
ととゝ〳〵び　燈火とら靈異記よ燈もよえ万葉集よ留火〳〵えたり〇仏のと
ゝ〳〵びハ佛名よゝろ〇燈ここえん〳〵て光をまんごらふ列子よ燈將厥者必
大明ごええり〇女媧氏石を煉く天を補ひ〳〵とらふ石を敲ち〳〵火を取昏黒
の変と通〳〵天の及ざる所を補ひ〳〵是後世よ喜と焚く暮よほくの始めり

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

ととかゞ　輩又衆爲類黨類徒黨同伴者とゝろ〻朋族の義也靈異記ゟ傚新撰字鏡ゟ儕とゝろ〻〇倍語ゟ輩ゟ倍ゟ又倍ハ等也〻ゑゆ又字音ゟ

鳳飛群鳥從以方數故借爲朋黨字とゝろ〻て鳳亦鵬〻名〻又族もよし

禮記注ゟ類也〻ゑの又曽をとゝめくゝ

ととかゞ　友鏡の義也袖中抄ゟ我髮又ハ人の髮の白くゝと雪ゟゑ合せるあり

賀之集ゟ

黒髮〻雪〻の中ゟくゝとゝれい友鏡ゟとゝろ〻

ととかゞも　神代紀ゟ取捨とゝゑゝろ外ゟ此ものゝ義ハ一ゝ万葉集に左右をよゑゝろ〇

土左ゟ〻ゝまをかゝまをとゝろふハどゝもあをかゝもあをともあるを此ゟ成俤

緣ゟどゝくゝとゑ轉詞也

ととゝゝれい　ととかくゝとゝろ〻ゟ詰也やゝとまをせいの義ゟ徒然草ゟゝとゝ

ふゝ〻ゟハゝゝとゑゝろう

ととまつのゝ　友待雪の義也雪のふりくゝ又ふゝ〻人とてハ已ゟゝ〻雪の消を

いろ〻ゟふゝ〻ゟ詩人玉屑ゟ殘雪の末冰待伴とゑゑゝろ唐の俗語〻ろう

欸ハ家持集ゟうゑゑ源氏ゟうゑ友まりべかりき人殘りゐる雪〻ゑゑゝろ

ととのぞめき　万葉集ゟ友驅〻ゑゑゝろ友共ぞめきさゝぐ意也

ととのみやつこ　日本紀ゟ伴造〻ゑゑゝろ国造ゟ對〻ゝろ〻八十伴緒の職掌あり部

類をすべゐる任をらせようて孝徳紀ゟ若憂訴之人有伴造者其伴造先勘當

而奏せ〻ゑゑゝろ殿守のともの〻やゝ佐ゝしゝやゝゐゝろ外ゟゝとゝろ

〈ととや　欸ゟ袖めゝせ〻やゐれゝろ〻ゝやの義ハ疑ひ捨るてゟ、ゑゝとゞゐてゟ

てゟゝとゐゐも同〻〇雞鳴とゐゐゝろ毎の義也〇鷹の毛をかゐるともやゝとゐゐゝろ

ゝやゞゝろふやゞうとや出のたゝなゝとゐゐゝろ〇ゝやの野伊賀ゟあり万葉集ゟゐ

ととやま　外山〻出ゝ殘ゐる山とゝゝゝの義〻ゝとゐ山〻一戸の意ゟゑみ〻欸とあり

古事記ゟ戸山津見神あり〇鴨の長明ゟ幽居や〻ハ日野の外山也

かゐゝ身の車ひゝゝのゝ〻ゝゐれゝゝちゐゐれ石ゟ名ゟ殘りりり

遺遥院殿の欸方丈石ゟゐり〇ゝやゐれ露ゝゝゝゝゝゝゝの欸ハ後拾遺集ゟ

ゝちのおゐひゝゝゝゝの家ゟ人〻酒ゝゝ人〻欸ゟ〻待りゐゟ遥ゟ山の横ゐをゝゝ

ふゝゐゐゐゐゐゐ外山のゝゝゝゐる学ゟゝハ遥ゟゝゝ題ゟかゐひ〻悠然ゝゝみゐふ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

より自然に雲ぬいとふ心のはたらきる所に眺望せる体をいふ事

掾むとうとくれは雲峯にも尾にも立かくしけり

掾ひ雲にはしらしる足引の山のひよりこ白浪志らくとも

是ホ沢とりくよりれしなほ一し○匡房卿は叙正二位しかれども後拾遺集此歌には

大江匡房朝臣とええたるは四位なるほどに掾中納言といふ千載集によりて後人しる

せるなるべし○外山の城は越中にあり土岐光明外山城称を

△とゆけ　高野天皇紀の詔伊勢五部書に止由氣とええたるは古事記に登由

宇氣神と書し舊事紀に豊受神と云せりやよりけのよりて反由也よりて千五

百番歌合にはとよりけとよりけとよりけとも中ほれり外宮の御名也○大殿

祭祝詞に屋船豊宇氣姫命注に見稲霊也俗詞宇賀能美多麻とえ白此事

日本紀に記さぬは大疑し

△とよ　豊とよりて富世の義之といふ諱訓抄に茂もよりて葦原中國なと

豊字を冠にせしは称美の詞也大泊瀬とも豊泊瀬ともいふ如し

とよむ　日本紀に驚駭をよりて万葉集に響又動をよりて豊より出る詞

なるべし山とよむ山下とよみ行水なと皆ひびくをいふ也

とよこや　豊受の宮をいふ○とよこや人は外宮の神人也○とよこや川は今

いふ宮川也万葉集に度會の大川とよこ又齋宮の宮川とも又曰豊川は

宮城の西北に廻れる川をいふ

とよとれ　神代紀に扇をよりて万葉集にもほとゝとよとしとええたる

とす反む也又とよむるといふに令響と書り後拾遺集に

白波の立ねりしたよなかやなるとよらの里のやとゝられよりし

○新点に天に扇を國に扇をとよめり

とよれあり　日本紀に宴會宴竟又樂府古事記内裏式に豊樂をよめり

豊明の義也夜を日にはいて酒宴するをとて名くる也よりて大嘗會なとの歌

に多くよりて元日宴といふ題に顕昭

む月立ちふのあそひやとゝ　此の義明のとしきなるべし

とよくさぐも　万葉集に豊旗雲と書り雲の旗に似たるをいふといふ豊

は大の義文徳實録に有白雲自艮至坤時人謂之旗雲とええたり祖中

秋よい海雲のよう〳〵うつ
とよばうるあ　神樂歌よう色豊阿姫〳〵書う天照大神とまうすをいつう
河海よい五節の舞姫也〳〵もえええう一説う豊受姫をうう〳〵記謬あるう
一〳〵どらつうけばう音通う
とよさうけるう　祝詞式よ朝日の豊栄登〳〵ええう古事記の秋よ朝日のさみ
さうえそ〳〵いつるう〳〵逆の字を昏るい借字也金葉集う
〇くうう〳〵妬めるう男日に君よほう人百代のあえ
〇とら　虎をようそう暦注よ武をようむ〳〵ふう人ととうの条也一説よ擬人虎と
於菟とらふ於い菟声うるい倭人も同音よ
〳〵いう或い高麗の語也〳〵もらいう〇虎と女〳〵て術を学ひうる事い齊明紀
よえう〇万葉集よ歎えうる虎うやうう〳〵ええ六百番歌合よ
かう〳〵うの虎ふと安之〳〵入ようもまふ〳〵ふ多路の去そあやふ紀
新千載集釋教よ
什方菩薩〳〵衣のふうよい虎ふ安野人もむつまう〳〵うよ

是い摩訶薩埵園中に捨ん虎の子を産〳〵餓たるとて衣を脱行の救よ掛〳〵虎
よ身とおえたる故事金光明経よえええう拾遺集よもえええう〇酉陽雜俎に虎殺人
能令冤起自解衣方食とあ〇虎い毛と惜ふ人い名を惜むとうふい金壁故事に欵
死留皮人死留名とえええう〇満剌加國よ黒虎あり近ふ沈蝦事よりも先し
らふ〳〵虎嘯而風起の語い孝經の序にえええう〇大磯の虎御前尼ふあう諸
國修行の時熊野岩手村よ死す車塚あうと犬著聞集にう西参河のとうう
里い本ふ村とらふ〳〵近年孝女とう〳〵あうう呼ふとう〇ごう茶作とて
寅日を縁日とするい山城葛野の太秦某師の像い長和三年甲寅五月甲寅安
置〳〵るよう日本紀畧よえええう
どら　今昔物語よ度羅嶋の事を載〳〵人の中よ行るくふして人よ似をえ
うに物をくらふ者とい度羅人とらふえええう續日本紀よ度羅樂あう度
羅い耽羅と同し〳〵こくや今い朝鮮よ屬し濟州〳〵うう延喜式よ肥後耽羅
鼈令い義解よ耽羅晡うる〇鉦とらふい銅鑼の音也倍よ右よらふ人のまそ
らうふ〳〵くらふい度羅と鉦よあてもらいつるふ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

とらす　人に物をあたうるをとらすと云　今取の義と源氏伊勢物語などにも見えたり　匿房の歌

こらす　を人よらぬ社をたのむらん神もこらすや秋の夕暮

こらふ　捕をとらふるあみなる〻又攫ひとるをもいふ　続日本紀に大虫皮とかけり　又因ひとらるるをもいふ又とらはれて河に石らも也

とらかす　今温の義文選も淘汰の字を用ひたり〇物よこすかとらかすと云

鬼物よおそるる義也

こらのかし　左傳に鼻比とらえと鋪皮を鼻席とらふ續日本紀に大虫皮とらえ大虫は虎の俗称也蝦夷よりも出せり〇擔垣女集ふ虎の皮尻鞘を顯ふて肥後守のよませり

うごかしくゆくらゆくらめくらめく川の尻こやけうめい浪のよる

こらのかし　紫式部日記皇子誕生の條ふ虎の頭宮の内侍ふて御さんまゐるとゑえたり本草ふ虎頭骨作枕辟悪夢驚悸尸上辟鬼初生小兒蒜湯浴之辟悪氣去瘡瘕驚癎鬼疰長大無病とゑえるもこれ

〽とろ　まとろふ寤寐の義にや〇俗ふとろくともどろくともふみとらふ骨のあくるをもいふ

とろく赤き肉のあるをとろとろ汁ふ煮ふるをもとろとろ湯ふ煮ふるをもいふ

とろの名をきよせうおの歌ふ多くよめるは天宝遺事の名妓劉国容ふ歓寝方濃恨雞声之断愛とらつる意也〇名物類称ふ鳥ふして鳥とらふ雉の事也しかるにこれ仁徳天皇の始てゑるをあはせたまふよまぐ雉をとうたるよりこれ

樂中曲童舞一名鳥一名聖明樂とうえたり通典ふ高昌獻聖明樂とうえ酔郷日月ふ太常樂とらん本胡樂とらつる〇鳥佛師の日本紀ふ鞍作鳥為造佛之工といつる者にて尾張國建中寺の阿弥陀ふ尾張大納言家の寄附ふて鳥の作ふ傳ふ

こうね　和名鈔ふ雞棲とうえたり鳥居の義也神社ふ必らず鳥居あるは神代紀の長鳴鳥の故事ふ起れり衝門ふ近く又画陽雑俎ふ東門鶏撲木とらふもこれふ

ふり華表とするはあやまれり〇又古事記の歌ふほづえは鳥居かしらあるをほとふ

ふ諸鳥の宮社ふ避んたそにもあらぬづし〇神宮の鳥居は異あり應安遷宮記ふ

東西北三方各有鳥居とうえ文保記ふ箭兵仗太刀男女念珠本箏持経禁入第二鳥

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

居ゑて又第三の鳥居の内を内院とし外を外院とし中右記に云ふ是也鳥居の制は二柱嶋木黒木三輪總合葉坐籠(カタ)刺等の名あり黒木は皮付其木を三輪は二柱の左右より一段低く鳥居あり扉ありて閉ぢ是を三光の鳥居と号總合は近江山王の鳥居是也笠木の上に又三角の笠木あり四足とふもあり又攝津住吉石鳥居は二柱四角なるあり○延喜式を考れば御腰輿腰輦いも鳥居あり今京師いづく送葬の時うしろに載するもの居あり世よう唐人にも移てるあり一紀州の墓所にも皆鳥居あり○北山抄に鳥居禁掖秘抄に禁中に鳥居障子あり類聚雑要抄に人家にも鳥居と名くるものあまた○明憲尚書記に御葬場殿に白木の鳥居を作る事も大和の國に死人を焼る所に必ず多き居立ふり伊勢神宮長官の墓所に鳥居を建る東寺にある慧果の廟記に鳥居あり是ハ葬表を摸せるなり一紀州の墓所にも皆鳥居あり○北山抄に鳥居一基とふも也○鳥居強古(コワ)衛門天正の比長篠勇に勝頼と答の戯語晋の解揚の疑の荘王に應ると數千歳の下一口に出るとも類せり○鳥居ら原い日向國穂ら原の遺志あるにて又せしい欽明紀の伊企儺もまた是あるて皇后の故趾にらひ傳へたら鳥居領い信州にあり岐蘇の御嶽の鳥居とふこと

ふよ在しごふひ近江の鳥居本も多賀明神の鳥居ふに在しふ鳥居氏い熊野別當の後あり○鳥居い本笠木を指てふ民折ふる居あり笠木也ごふめ

倭名抄に雀盲(トリメ)とあり暮方よふよふ見えず取得の名突訓往来に招居有脅之族(トリメノヤカラ)とええふ抄ふえねも

いまだ詳ならず○孟子の不肖をものこととせざるの義通ふ○諺よくふふいもとふえとて愚者の一得を喩ふる也

とふで　捕手也把勢とふふ拳法を捕縛と同しふ等の類ふ使手あり本邦ふも陳元贇より傳ふふふ城の近見ふ小城を築もふ取出の義也○砦

ふよりも小字典ふ壘也通作柴塞とふふふ

ごふこ　雲又擒又俘をよろふ捕籠の義ふ一○和名鈔ふ鳥籠をよろふ

今ごふかごふふ○拉草紙ごふとがふにくくげるごふふ義をふふとふ兩居

支ふごふひとふもふえごふ

ごふべ　新撰字鏡に鞍とよみ又ふもたごふ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

とうし 本朝式に鴾とかけりよめり同物なるにや○とう寺 京の東にて鳥戸寺あ
りし今廃せり阿弥陀か峯是なり
とうじき 宇治拾遺に大食をとうじきとよめるを見て大饗の
おろしとて給仕する格勤の者どもの食するをいへり鳥食の義なるべし今も種
かしの時の焼米を農家に鳥の口といへるに同じ
とりのこ 神代紀に雛子をよめり卵をもいふ○とりの子を十づゝ十かさぬるとも歌
伊勢物語にみえて六帖にも入り蜻蛉日記に鳥の子を条として重ぬる事あり説
苑に出たり○鳥の子色といふも白色のうるみたる色をいふ也○とりのこがみといふ
も雛卵皮に似たるをもて名づく紙譜に閩人以嫩竹といふ是也
とりがなく 吾嬬の枕辞にいへるは万葉集にも鶏は夜の明る時になく故に明と
いひかけたるといへり一説に神楽歌に雛はかけろと鳴ぬなり起よく我かどよわ
人もこそ見れといへり此義なるべしといへり
とりだすき 綾の紋にいふ鳥襷と書り指貫の紋にいふ後鳥羽院御歌にも鳥襷
は尋常浮文也綾并に固文不可然と見えたり両鳥相離の義を取也伊勢皇大神

宮禰宜譜図帳に天見通命 木綿葛手鳥繩懸とみえたり羽がひの伸たるを云也
一説に今も屏風の裏の雀是なりといへり或説に屏風の雀形は比翼の鳥にならふ風鳥也とも
いへり以尾能飛となん
とりのあと 蒼頡が鳥跡を見て文字を造りしよりいへり呂氏春秋にみえたり顕昭
○歌によめる千鳥とよむは大己貴命の故事なるべし古記にみえたり○源氏にあ
は千鳥なくよみをあたまとやがてよむは歌のなりひとといへり
やしき鳥の跡なきはやうなれるとかいへんとあるは手跡のあしきをい
ふ也
とりふる 執障の義分解解散なることを譯せり古事記五百引石取塞其室
戸ぐとみえたり
とりあはせ 和名鈔に闘雞とよめり古記に天慶元年三月四日十番鶏闘あ
りともみえたり○口語に取合の義とせり
とりかへ 菅家万葉集に大虚にはかたしもとひとよめるは取かへくならへと
意也といへり○徒然草にとりかへされて齢をなしとといへり古歌に

国立国会図書館 タイトル『和訓栞』 請求記号 837-48
ガラス使用

ろかつを物ともかなや世中をあらし吹うれ気あるこゑ

秋と同し大和物語の秋よりとをとゝ

ちよ〳〵そやろうもいつくそこゝろうつりいろ〳〵

ろうそで　日本紀ニ懸沢ニあり取垂ト言事記ニ見えたり据也万葉集ニ木綿ともて〳〵ニよめる秋ニ首あり皇極紀ニ懸掛木綿ト云

ろうのそら　雞の虚音也孟嘗君函谷関沢河をひそ〳〵故事ニよりて清ニ鋪言

うよみそめし　詞也後拾遺集ニ大納言行成物語ふくしてニ侍りける内の御

物忌ニこもりていとゝ島の声ニまがふさしてくらひおて

也侍りけれふるさと人の画谷関の事ニやくひつりくるをとう

てを先い逢坂の関ニ侍るといふをいひ来まのかく沢

いふ也後撰集ニ

天の戸と明ぬくらひ逢坂ニ

○契仲云老の後四國の辺ニおちふれをるうう〳〵続千載集ニ老の後ニこもりて

侍りける沢人の事てすうてまろうりまいいて秋河のをい都の辺ニこりあけ

るる〳〵紫日記ニいへる掠又枕草紙ニろう沢秋せ〳〵ふどよりかう行ニ文

よおろそれ見とすく哥也かゝたくひきニ一体沢出るふとをとらふべう

ろ

ろうそくニ　時をそうりて奏する者をとらふ後小松院御製ニ

この比をやろうそくニうをも告こゝろそてふしれとふ〳〵あろうも

朗詠集ニ雞人暁唱声驚ニ明王之眠ニといつる意ありろう

ろうびのもち　螺鈿鈿の柄首ニ鳳鳥の頸を造りて〳〵そるをり鷹飼所帯の

鈚ふろうニ江家次第ニそえたり

△とり　取揉等の字をとりそろう乗も同一留の義ニやらりるれろの行そくく

らけう俗詰やう用る事をもとろのけるをも唯ろうニいつたとふをろうふ〳〵

の名も執蓋のそあると俗ニいひ立をおろうニをろうとらふ〇日本紀ニ員をとあり

古今集ニ先名ろうていふことをそる夏之〇雞林類事ニ方言凡呼更物皆曰都

囉〳〵ろえたる筆をとるい右筆燭とるい泉燭苔新をとるい采蜂をとるい掇鈴

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

837
34
48

とゝるに把ちとるハ手刀をとるに握拘をとるハ執也霊異記ニ擒もとゝろ又取娶ニ同ー

△とゝる　太平記ニ陽蕩ゆとゝるとゝろ又とゝるあとゝるとゝろ

とゝろ　泥をとろ土ニ水のとろけゝるなり備後福山にてたづんとろ〇人と罵の詞ともろ世説ニ酔て泥の如ーといへるに意也楊升菴集ニ倍譜ニ柔言索物曰泥ともゝろえゝとろ〇類聚國史ニ山城のみづゝ池を泥溝池と書ろ〇出羽ニ長瀦あり瀦俗の造字也

とろくる　蕩をとろくる解る也ろハ助の辞ニてろくるハ今蕩也自他の異也〇とろくとろくニ酔も同ー伊勢神宮のことひしーことを名付或ハ雛目ともろくめゝ譯ろ〇人の俗語ニこゝろーとゝふも同ー〇和泉大鳥郡ニ取石池あり方架集ニ姓ろゝと取石池の浪間ようろゝるみ音けゝる私をめゝー續ニ本紀ニ東所石頃宮和泉和泉郡舞村ニ故跡あり〇出羽ニて切々とろくニ事をとゝふもくろ

先掲ゆらふてるゝゝの轉訛でゝ先ゝゝハ擬也とらつ一説ニハ土呂坊の条永祿五年参列土呂の一向宗黨徒結んて敷ゝ御家人とゝゝゝ多ゝ黨せろ先ゝろ事ろる倍語ろーーとらつ〇速江ニハ酒荘人ゆらつ

とゝゝふ　船とふ万葉集ニ門渡ゝゝ白門ハ海の門也御門水門ふとの詞ニ同又疾渡るを云万葉集ニやゝ船とらふ赤人集ニやゝゝゝ私ゝゝもらつ

△どゝ　土堰ニ書ろ或ハ土圍也ニらつ城の土居ハ垣也〇姓氏ニ土井とらつも見ゆ

一ー土居ハ延喜式ニとゝろ終ちぬゝよろ伊豫ニゝゝあと唱ー河野の一族所々ニ一かまへゝるを称せりとゝも土居得能ふゝるゝ人らつ土居得能ハ南朝の始ニ義を唱ゝ長門の探題を攻走らとゝゝゝ土居得能ふゝるゝ人らつ〇神宮ニふとらふ事ある燈油を誤りて呼ろ神事ニ大床の下ニて燈をとる物忌父の職也

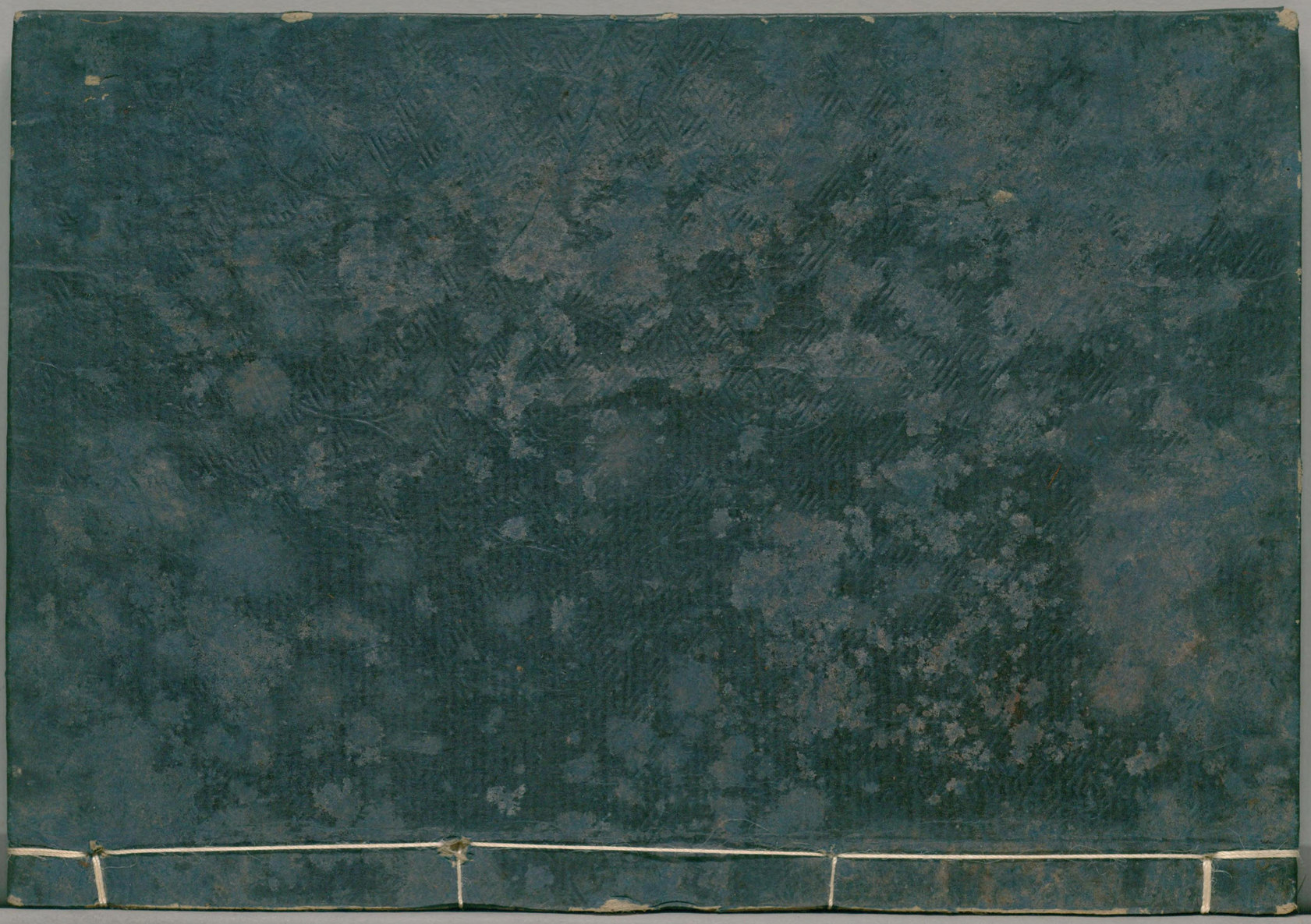
どゝろん　笋の十二生中の三経をとろ土の名也和名鈔ニ井為沼とゝゝたり

△とゝ

△とゝ

〇とゝてのとゝらふ事も見ゝたり

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用